
クンツァイト

胡麻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クンツアイト

【Nコード】

N5114N

【作者名】

胡麻

【あらすじ】

「私は愛なんか信じない。だって、愛は脆くて壊れやすいモノだから。今までもこれから誰も好きにならない！」そんな雫の家族はあの日、バラバラになった。母は妹を連れ、オトコと蒸発。父は酒と女に溺れ、雫を暴力で痛めつける。拳句の果てに自殺して、たった一人、雫は寂れた家に残された。絶望に暮れた雫を引き取ったのは、田舎町に住む父の妹の緑だった。其処で出会ったのは生意気な少年、一之瀬透。黒いサラサラの髪に闇を吸い込む黒い瞳。何故か、彼はやたらと雫に絡んでくる。愛や恋が分からないまま、雫は

彼に翻弄される。そんな時、透の兄、楓が現れて…

1・ムスビメ

広がるのは何処まで行っても青。蒼。アオ。

何の憚りもなく、服を脱いで、水着になると、私は無限に広がる海に飛び込んだ。

バシャバシャツと冷たい水が火照った軀をひんやり包み込んで気持ちいい。

そのまま沖まで泳ぐと、私は海に侵入した。柔らかい水が私を迎え入れた。

海はいい。特にこうして潜っているときに、一番好きだ。

回りには私以外、何も存在しない。何者も阻害しない私だけの空間。

やっぱり、此処に来て良かった。

しかしその考えは、オバちゃんの一言で吹き飛んだ。

「え？」

「だからー、今日からあー。海の家もね、人手が足りなくて困つたのよー。雫ちゃんが来てから、幾分マシになつてたけど、夏休みも半場でしょー？アルバイト雇つたのよ。イケメンでしょー？」

そう言つて、オバちゃんがバシバシ叩く人物を恨めしげに見た。

茶髪に両耳にピアス…、いかにもチャラそうな男…、とは正反対の冷めた瞳の好青年がそこにはいた。

私がじつと見ていたのに気がついた少年は、ふんつと鼻を鳴らして顔を背けた。

何よ、コイツ

！

私は、店の裏の古い井戸から伸びた手押しポンプの水を引きながら、その手に力を込めた。

一ノ瀬透…。

涼しい顔しちゃって。ああいうタイプが一番嫌いだ。

さらさらした黒髪に切れ長の黒い瞳にちょっとでもときめいてしまったなんて、死んでも言わないんだから。

冷たい水が踝に当たって、ハッと下を見ると、汲んだバケツから水が溢れ返っていた。

「…覆水盆に返らず」

イライラしながらその声に、振り向くと案の定、一ノ瀬透がいた。

コイツは、何かと言って、私に突っ掛かって来るのだ。今日は何回目だろうか。

「何よ、すぐ片付けるわよっ」

訝しげな顔をして答えると、ふーんと言って、一ノ瀬透は店の方へ帰って行った。

まったく、なんなのよ、アイツは。

「新谷さん、コレ…」

それからバケツを並々満たし終わり、私がせかせか水を運んでい
ると、東が私にタオルを手渡した。それに顔が自然と綻ぶ。

「ありがとう、東君」

「いや…」

東は口ごもりながら、じゃあ、と手を上げて、立ち去って行った。

東邦彦はもう一人のアルバイトだ。素朴で、何処か影のかかった
少年に、私は共感を得ていた。

ああいうタイプは好きだ。だけど、アイツは…。

私はタオルを握り締めると、眉を寄せて、作業を再開し始めた。

イライラしたときには、海に潜るに限る。私は、Ｔシャツと短パ
ンを脱いで、一日中着ていた水着姿になった。

もう夕方で、地平線に沈んで行く夕日が美しい。回りには、カッ

ブルと老年の夫婦がちらほらいるだけだった。

足に当たる海の水は、思ったより冷たかった。もう夏も終わりが
もしれない。

それでも、少しぐらいなら大丈夫だろう、日が暮れる前に浜辺に
戻れば…。

この世界から脱出したくて、私は海に逃げこんだ。あまり遠くま
で行かず、沿岸付近で私は潜った。

海が優しく迎え入れてくれた。母なる海はなんと寛大なのだろう。
頬に零れたはずの涙は海の水と溶け合って、調和された。

瞳を閉じると、いよいよ世界は私だけになった。

色とりどりの魚も、キラキラ光るオレンジ色の海もない。

純粹な闇の世界。

私は、此処へ逃げて来たんだ。

中学2年の夏の始め、父親が夜中に暴れ出し、母親が泣きながら父親を止めて、妹はわんわん泣き出した。

5日経つと、我が家はしんと静まり返り、部屋を出て、キッチンへと下りると、机の上に預金通帳と手紙が置いてあった。

雫へ

勝手に離婚を決めてごめんなさい。でも、母さん限界だったの。雫もお父さんがどれだけ酷いか分かってるでしょ？麻由は母さんが引き取ります。貴方だけ、其処に置いていくのは、心配ですが…。何かあったら此処に行きなさい。それでは、元気で。必ず迎えにくから、それまで待ってて下さい。母

その手紙を見たとき、嗚呼…なるほど、とただそれだけ思った。

私は、捨てられたんだ、母さんに。

それから、母さんと妹がいなくなった我が家で、父さんが毎晩の

ように知らない女のヒトを連れて来て、部屋に入って行くのを何度も見た。

それがない日は、毎晩酒に明け暮れて、酔った父さんは私を殴り続けた。哀しくなかった。

だって、きっと父さんは哀しくて私を殴るんだ。

涙が出ないから、変わりに暴力を振るうんだ。

学校に行く度、先生や友達に、痣のことを訊ねられ、先生が家庭訪問を提案し始めた時に、コトは起こった。

家に帰ると、息が詰まるような臭いが部屋を充満していた。

嫌な予感がした。鞆をその場にドッサリ落とすと、私はリビングに駆け込んだ。

其処には、手首を切って、横たわる父さんがいた。机の上には、中身が零れた何かの薬品。加えて、切れたガス線。

私は知っていた。父さんはこの世界から脱出したかったのだ。

だって、母さんは、いつも家にいないじゃない。

たまたま隣町に友達と映画を見に行った時、知らない男のヒトと怪しい建物に入って行くのを私は見た。

震える手を抑えて、友達に其処が何処だか聞くと、ホテルだって教えてくれた。

やっぱりか…、やはり母さんは父さんを裏切っていた。父さんは母さんが嫌がるから、煙草もお酒も止めて趣味と言えば、ドライブと日曜日の野球観戦なのに。

母さんは、父さんをアイシテないんだ。

だから、私には愛というものがどういうモノだか分からない。

暫く、ショックで放心していた私の所に近所の人が通報したのか、警察と救急車が来た。

私は動かなくなった父さんの手を一晩中握っていた。

冷たくなるその手を掴んで、父さんの魂を僅かでもこの手から逃すまいと強く強く握りしめていた。

朝が来て、隈を作った私の肩にゴツゴツした堅い手が置かれた。その人は言った。

「父さんを今から、天国に成仏させるんだよ」

知ってるよ。焼くんでしょ。父さんは、冷たくて狭いお墓の中に押し込められるんだ。

「嫌だ！父さんが逝くなら私も逝くから！私も連れてって！」

置いてかないでよ…。

溢れる涙をそのままにして、私を押さえる白衣の悪魔に毒づいた。

しかし、悪魔は父さんが白い小さな箱に入るまで離してくれなかった。

それから、小さくなった父さんの前で、10日間手を合わせて、

祈った。

私も連れて行って、父さん。

だけど、祈りは届かなくて、次の日に養護施設のオジサンが私の腕を引いて、無理矢理車に押し込んだ。

私は泣いてせがんで、母さんが残した手紙に書いてあった住所を伝えた。

此处に行くから、解放して下さい、と。

私は重い目蓋を開けた。其処には、群青色になった深いアオが映っていた。まずい、日が暮れたんだ。私は手足をバタつかせて、浜辺へと泳いだ。

いつの間にか、オバちゃんがいる海の家は小さくなって、灯台のように明かりを照らしていた。

私は海の真ん中にいた。

沿岸まで戻った時に、足が吊った。

そうか、私は此処で死ぬんだ。そう悟って、海に沈んだ時、力強い腕がガツシリ私を掴んだ。

驚いて見上げると、其処には私の嫌いな一ノ瀬透がいた。

コイツ、私を殺しに来たの？何処までも嫌な奴だ。死ぬなら、一人で静かに死にたいのに。

波に埋もれながら海から顔を出した時、一ノ瀬透は言った。

「俺に掴まれ！」

怒鳴るような声に私は目を見開いた。

一体、何がしたいんだろう。

その声に、私はいつの間にか一ノ瀬透の背中にしがみついていた。

一ノ瀬が私を運んで泳いで行く。

ゴボゴボと口に入って来る水の中で、広い背中が見えた。

それは、父さんを思わせた。私とその背中に擦りよると、彼はビクリと背中を硬直させた。

ふいに、足が止まり、私たちは海の上に浮いた。

もう、足だつてつくのに。

一ノ瀬は、私の腕を引き寄せると顔を近づけて、唇を私に押し付けた。

何が起こったか、一瞬分からなかった。

それから、彼は私に口づけているのだと気がついた。

2・カリヌイ

私は、かき氷を作りながら、一ノ瀬透を睨んだ。アイツは何故、私にキスしたんだ？意味が分からない私は、じっと一ノ瀬透というニンゲンを観察していた。オバちゃんが私の肩をトントンと叩いた。

「何？オバちゃん？」

オバちゃんは、いやらしい笑みを浮かべるとふふつと笑った。

「雫ちゃん、一ノ瀬君が好きなのは分かったけど、いい加減、その氷をなんとかしてくれないかねえ？」

え？と、手元を見ると、かき氷だったはずのモノはまるでエベレストのように積み上がって、最早かき氷なのか何なのか私は目を疑った。

「これ、私が？」

呆けて眩くと、一ノ瀬が私に近づいて来た。

「何やってんだよ。ほら、俺がやるから、お前はバケツ持ってこいよ」

一ノ瀬にそう言われて、うん、と頷くと、私は店の裏に走り出した。なんだか、アイツに聞わると録なことがない気がする。でも、今はそんな場合じゃないか。あの残骸となった氷の山をどうにかして片付けなければ…。

裏に行くと、東君が井戸から水を引いている所だった。私を見ると、くしゃっと笑った。

「これでしょ？」

東が、差し出したのは、私が望んでいた青いバケツだった。

「すごい！なんで分かったの？」

私が顔を綻ばせると、彼は照れたように笑った。

「だって、雫ちゃん。いつも、このバケツ持って行くでしょ？」

「え？」

東は、いつも私を見ていたのだろうか。そんなことに気がつかなかったなあ、と考えて、ふと気がついた。

「栗ちゃん？」

「ああ、僕のこととも邦彦で良いから、そう呼んで良い？」

勿論、そう答えると何だか照れ臭くて二人で頬を赤らめた。その時、冷たい声がして、私たちはカレを見た。

「何やってんの？」

冷めた瞳で、此方を見つめる一ノ瀬。何故だか怒っているような気がするの、私の思い違いだろうか。カレは、私の腕を掴むと、歩き出した。

「あっ！バケツ！」

そう言って、振り向くと、邦彦君が此方に走って来た。

「栗ちゃん、はい…」

邦彦に手渡された青いバケツを掴んで、お礼を言った。

「ありがとう、邦彦君」

邦彦はそれを聞いて、くしゃつと笑った。一ノ瀬が握る掌に力が籠った気がした。

「一ノ瀬君？何時まで、握ってるの？私、片付けなくちゃ、お客さんが…」

カレの瞳は鋭くて、何だか狂気を孕んでいた。

「お前…」

その声に、ビクッとびくつくと、一ノ瀬は、ゆっくり私の手を離した。

「…」

沈黙が二人を包んでいた。先程の一ノ瀬は、まるで病院にいた白衣の悪魔や、私を見る父さんのようだった。カタカタ震える身体に気がついて、私は声を絞り出した。

「…あのね…私、行かなきゃ…だから。ほら、…片付け…」

途切れ途切れにそう言うと、一ノ瀬は目を細めて頷いた。それに何故だか、ほっとして彼の後ろをついて行った。

それから半日、カレとは口を利かなかった。何だか気まづくなり、私はカレに声をかけた。

「あの…一ノ瀬…く…」

その声は、海の店に来た女の子たちの声に揉み消された。

「ねえ、ねえ、君。ずっとこの海の家で働いてるよね。私たち、キヤンプで此方に来てるの。一緒にビーチバレーしようよっ」

カレは、チラリと私に目をやると、それを逸らして弾けたように笑った。

「いいよ。俺、結構強いよ?」

そう言って、ビキニ姿の女の子たちに囲まれて、立ち去って行くカレを私は見ていた。

「…栗ちゃん!」

その声で振り向くと、邦彦がモジモジしながら立っていた。

「どうしたの、邦彦君?」

何か悪いことでも起きたのだろうか?じつとりと邦彦を見つめていたが、何処にも変わっただころはない。だったら、何だというのだろうか。

「あのさ、今日、バイトが終わったらさ、町に出掛けようよ…。今日、お祭りだし…」

私は小さく声を漏らした。そうか、今日は小さな田舎町の夏の唯一のイベントの日だ。

「だけど、私…浴衣持ってないし…」

溜め息をついた私を邦彦が励ますように言った。

「大丈夫だよ。僕の妹に借りればいいよ」

妹、という言葉に私は脈打つ胸を抑えた。

「雫ちゃん？」

いけない。此处で冷静でいなくては、私が喚いて、オバちゃんにそれがバレたら、またあの養護施設のオジサンが来て、狭い車に押し込められる。それは、御免だ。

「あり……がとう……。じゃあ、バイトが終わったら、ちょっと待ってくれるかな？」

邦彦は、頷くと、パラソルを畳み始めた。もう夕方だ。借りた浴衣を纏ってお祭りへ。まるで日本のシンデレラね。だったら、王子様は誰だろう。ふと、一ノ瀬の顔が浮かんだが、まさか、と私は首を捻った。

お祭りは、人がワラワラいて、まるで蟻の行進の如く、人々は押し合いへし合いして、なんとか前に進んでいた。こんなに小さな町なのに、何故、こんなに人がいるのだろうか。まさか、彼等は、地下世界か、空の彼方から飛んで来たのだろうか。しかし、その疑問は、邦彦がすぐに解決した。

「町おこしだよ。ほら、この町なんの面白味もないからさ、お祭りで、隣町とか、違う市から人が集まって来るんだよ」

「え？」

私は眉を寄せて、怪訝な顔をした。小さな町のお祭りにこんなに人が集まるだろうか。ちらっと過った疑問も、またすぐに邦彦が捻り潰した。

「この祭りの花火は凄いいんだよ、栗ちゃん。一緒に見ようね」

くしゃっと笑う邦彦に私も合わせて笑った。

本当は其処まで期待してはいない。正直言つて、家に帰りたい。あの誰もいないけど、自分の我が家へ。寂れたあの家へ。こんなに人がいるところは苦手だ。海の中に潜って海と同化したい。そうし

たら、二度とこんなところに来なくてすむのに。

邦彦は、ぼりぼりと頬を搔くと、私を見た。

「喉乾いたでしょ。僕、何か買って来るよ」

あんなに、人が並んでいるというのに、邦彦は、一人で並ぶつもりなのだろうか。

「私も並ぶよ、邦彦君。時間かかるでしょ？暇つぶしに話でもしたら…」

そう言つと、邦彦は顔をボツと赤らめた。いきなりオロオロとし、落ち着きがなくなった。

「いつ！いいよ！雫ちゃんは、其処で待ってて！ずっと立ってるの辛いでしょ？」

邦彦はそう言つと、私が何か言う前に人混みに消えて行った。こんなに人がいては、一度離れたら見つかる可能性はほとんどないのに。私は人を掻き分けながら、邦彦を追いかけることにした。

暫く、人混みに抗っていると、邦彦らしき人物が目に入った。良かった。そう思つて、手を伸ばしたとき、知らない男がその手を掴んだ。

「ねえ、君一人？だったら、俺たちと遊ぼうよ」

何処かで聞いたような台詞だ。右左と目をやると、仲間らしき男たちが私を取り囲んでいた。たらりと冷たい汗が背を伝った。もしかして、この状況はまずいのもしれない。私の腕を掴む男の目を見た。男はやはり狂気を孕んだ瞳で私を見つめていた。どうして私の回りには面倒が集まつて来るのだろう。

神様はよっぽど私を嫌いなようだ。そう思った時、白い手がヌツと人影から伸びて来て、私をその場から掻っ攫った。

その人物は、はあはあ…と幾分荒い息を上げながら、私を睨んでいた。何が、悪いというのか、一ノ瀬透めつ。カレは紺色の浴衣を着ていた。肌けた胸に目のやり場にこまり、俯いた。

「バカヤロウ！」

コツンと額が鳴つて、え？と見上げると、一ノ瀬透が私の額に頭を寄せて、くっ付けていた。

「心配したんだぞっ！」

「心配……？」

心配とは何だろう。相手を労ることだろうか、気にかけることだろうか。どちらにしろ、私はカレに心配して貰うようなコトは何もしていない。

「一ノ瀬君、何言ってるの？」

私は怪訝な顔でカレを見ると、ますます怒ったような顔をして、ホントにカレは怒り出した。

「お前は何も分かってないっ……！」

その怒鳴り声で、回りの人がギョツと一ノ瀬を見た。一ノ瀬は、物珍しげに見物する彼等を睨みつけると、私の右手を掴んで歩き出した。カレは一体何に怒っているのだろうか。

3・タマドメ

一ノ瀬透は、私を道路の段差に座らせると、はい、と手を差し出した。

「何？くれるの？」

カレの手にはコーラと、まだホクホクとしたタコ焼きの入ったパックがあった。それを私に押しやると、カレは私の横に座った。

「でもコレ…、全部一つしかないよ？」

一番の難点を述べると、カレは口を開けて指を差した。食べさせるとのことだろうか。なんて、理不尽なヒトなんだろう。眉を寄せて、割り箸をバキツと割ると、一ノ瀬は驚いた顔をした。

「何怒ってんの？」

何だと？それは、此方が聞きたいよ。さっきまで、怒ってたクセに、いきなり店に並んだかと思えば、次々と連れ回って。

「助けてやっただろ？」

その声に、私はぐつと声を漏らした。そうなのだ。確かに、私はあの場で困っていた。カレが来なければ、今頃私はどうなっていただろうか。狂気じみた欲望の的となっていたに違いない。きっと、また殴られる。それを助けてくれたのは、他でもない私の嫌いな一ノ瀬透。私はイライラしながら、カレの口に次々とタコ焼きを放り込んだ。

「熱いだろっ！コーラくれよっ」

「どうぞっ！」

私は冷えたコーラを差し出した。これでは、まるで下僕ではないか。私は眉を寄せた。

「此れが終わったら、私…帰る！」

その言葉に、カレは目を見開いた。突然、私の肩を掴むと、逃すまいとガッチリ固め込む。そこで、また私の身体はビクリと跳ねた。

「駄目だっ！まだ…駄目…」

そう言つと、カレは私が持っていたタコ焼きを奪い取り、私の口の前にそれを差し出した。今更、ご機嫌取りのつもりなのだろうか。だけど、タコ焼き一つで私は靡かないわよ。肩眉を上げると、私の口に無理矢理タコ焼きが押し込まれた。

「熱っ!!何するのっ!!」

私は、カレの手にあつたコーラを掴み取り、ゴクゴクと一気に飲んだ。それをカレはじつと見ていた。一気に飲んだせいで、噎せてしまった私はゴホゴホッと咳き込んで、胸を叩いた。

「…ゴリラ」

その言葉に、カツと頭に血が上つてカレを睨んだ。しかし、カレは宙を指差した。その指の先を辿ると、巨大なゴリラが君臨していた。私はギョツとして目を剥いた。しかし、よくよく見ると、闇の中に光るそのゴリラは、ビニールで出来ていると気づいてホッと息を吐いた。

「何だと思つたの?」

一ノ瀬透は、さも愉快そうな顔をしていた。コイツを喜ばせることは、私に取って、まったく嬉しいことではない。私は落ち着き

払った顔で、ゴホンツと咳払いした。

「……いいえ。何でもありませんよ、一ノ瀬君」

その言葉に、カレはブツと吹き出した。まったくこの男は失礼にも程があるんじゃないか？

私は、コーラを置いて、立ち上がった。蒼い浴衣についた砂と埃を払うと、一ノ瀬に向き直る。

「御馳走様、一ノ瀬君。じゃあ私、帰るね」

私は身を翻すと歩き出した。カレは慌てて、私の手を掴み取ると、横に並んで歩き出した。ん？なんだ、この光景は。一ノ瀬はふふつと笑って私を見た。気持ち悪い奴。

「あのさ、帰る前に寄りたところがあるんだけど」

カレは私の手を強く握ると、先立って私を引きずるようにして、人混みの中を導いた。私は、何も言っていないのに、カレはどうやら私がカレと一緒に帰ると勘違いしたようだ。

「違っつたら！」

否定しようと、もう片方の手でカレを掴んだ途端、カレはハタと立ち止まった。

「何？どうしたの？」

突然のカレの行動に戸惑いを隠せず、カレの背をぺしつと叩くと、一ノ瀬は顔を綻ばせて、何かを指差した。其処には、露店のアクセサリーショップ。キラキラ光るネックレスやら、指輪やら、シルバのアクセサリーが並んでいた。

「わっ！キレイっ！」

思いがけずの発見に瞳を輝かせて、店を眺めていた私にカレは笑った。

「欲しい？」

私は、一つのネックレスを夢中で眺めていた。ライラック・ピンクの透けて煌めく石。私はその石に必要以上に魅せられていた。もう一度、声がして私はハッと顔を上げた。

「あ…！うつん…。帰ろうか…」

それを元の場所に置くと、亭主はガツカリした表情を見せた。そんな目で見られても、私にはそんなものさえ買っ余裕なんてない。これから一人で生きて行かなければならないのだから。私はギュッと強く目を瞑ると亭主に背を向けた。御免なさいと、心の中で謝る。だから、後ろで、亭主が何やら良からぬコトをカレに吹き込んでいく姿は、私には見えなかった。

私は、拳を握ると、シャカシャカ足を動かして、歩き出す。早くこの場から立ち去らなければ…。呑み込まれてしまふ。ヒトに。情に。一ノ瀬透に。

それなのに、カレはほくほくした表情で、私の横に戻ると、図々しくも私の手をやっぱり握った。其処がお前の定位置なのか！？と私は聞きたくなったけど、恐ろしい答えが返って来そうで、私はぐっと堪えてその言葉を飲み込んだ。その様子を横で見ていたカレはさも不思議そうに私を見ていた。

「そんなに見ないでよっ。あっ！青海苔ついてる？」

私はハッと口元に手を寄せた。カレはそれを見てはにかんで笑った。

「…いや、可愛いなあって」

その言葉に、背筋にぞつとしたモノが走った。顔が硬直して、上手く笑えない。コイツは、一体何を考えているんだ。私はそこで気がついた。カレは私の反応を見て楽しんでいるのだ。私があたふたするのを喜んでいるのだ。今更ながらに、カレについて来てしまったコトを酷く後悔した私は、カレの手を振り払った。

「何、言ってるの！？そうやって、私を掌で弄んで楽しい？もう、ヤダ。私、帰るから！」

私はそう言い切ると、駆け出した。何なのよっ！アイツ！一ノ瀬透っ！アンタなんか、アンタなんか大ッ嫌いよ！！

浜辺まで帰って来た時には、下駄の鼻緒が切れていることに気がついた。怒りで、我を忘れてたけど、足は紐で擦れて、血が滲んでいた。私は情けないと思いながらも、下駄を脱いで裸足になった。夜の冷えた波打ち際で、冷たい水と砂が私の足を包んだ。それに、心が段々落ち着いて来て、忘れていたコトに気がついた。

「…邦彦君！！」

急いで、戻ろうと振り向くと、黒髪に切れ長の瞳をした一ノ瀬透

が其処にはいた。

「何処に行くの？そんな格好で…」

カレは冷めた瞳で私を見た。今日は一日中、見なかったのに、なんでまたそんな目で私を見るの？

「邦彦君！お祭りに置いてきちゃったのっ！きつと今頃、迷子になつてる！」

私は必死で訴えた。どうしよう。迷子になってたら。まだ、私を探してるんじゃないだろうか。あんな人混みに一人ぼっちで心細いに違いない。

私は、一ノ瀬を通り越して駆け出した。だけど、気付いたら腕を引かれて、カレの胸の中に手繰り寄せられていた。

私は絶句した。この状況、覚えがある。

一昨日の夜も、海の中でこうして抱き寄せられた。私は拒むことも許されず、カレに唇を奪われた。内心、シヨックだった。だって、初めてだったから。

私が誰かを好きになるなんて今までもこれからも絶対に有り得ないのに、なんでショックだったんだろう。考える前に、カレが言葉を紡いだ。

「東は、俺が家に帰した」

その言葉に、え？と私は声を上げた。一体、いつの間に、邦彦君に忍び寄ったんだろう。まさか、邦彦君にもあの狂気じみた瞳で彼を見つめたんだろうか。私は疑いの目でカレを見た。

「何？」

カレはさも不思議そうな顔をしたけれど、私はそれを崩さなかった。カレは、あっと小さく叫んだ。

「…何？」

「見ろよ」

カレが指差した方向を見ると、満月が海に映し出されてキラキラ輝いていた。私は瞳をランランと輝かせた。

「満月だっ！」

私は、カレを押し返して、丸い満月を見つめた。しかし、カレは否と首を振った。同時にバンツ！バンツ！！と音が鳴り、真ん丸お月様の横でキラキラ輝く華たちが返り咲いた。

「凄い数だね…」

私は、率直な意見を述べた。花火は、ドンドンあがり、月を覆い隠していく。私はムツとした表情で、花火を睨み付けた。こんなにキレイな月を隠すなら花火なんていらぬのにつ。

それを見ていたカレは顔を綻ばせる。カレは、彼女の首に手を回した。彼女はかなり驚いたようだった。

「雫…、お前は俺を好きになる。…必ずだ」

その言葉に、私はギョツと目を見開いた。何を言ってるんだ、コイツは。とうとう、頭がやられてしまったらしいカレはふつと目を細めて微笑んだ。

その笑顔に私はこの後、一生この一ノ瀬透に振り回される気がし

た。

恐ろしくなって、私は海の中へと逃げ出した。しかし、カレは追いかけて来る。

私にクンツァイトの首輪を付けて。

F i n . . .

3・タマドメ（後書き）

一夜漬けでシャカシャカ描いた小説です。もう衝動のままに描きました。気が向いたら続きを書こうかなあとも思っています。

4・デンファレ

俺は、イライラしていた。

雫は、あの日以来、姿をいきなり消して俺の前から去った。最後に見た顔は、まるで、化物を見るような目で脅えきっていて、その顔がずっと頭から離れなかった。

夏休みの最後の日、店のオバちゃんに、一体雫は何処へ行ったのか、と問いただしたが、苦笑いを浮かべるだけで、何も答えてくれなかった。

歯痒いモノを抱えながら、重たい足を一步一步進めて、俺は二期最初の教室に入った。何故か教室の一角に人だまりが出来ていて、不審に思いながら、横を通り過ぎると、其処にはこの夏中、頭から離れなかった蜂蜜色のふわふわした髪が頭を覗かせた。

まさか……！？そう思って、中を覗くと、薄いグレーの大きな瞳と目があった。

「雫……！？」

俺が駆け寄ると、雫は、あつと小さく声を漏らした。

「一ノ瀬君、久しぶり」

昨日ぶりだね、とでもいうように雫は微笑んだ。その笑顔に、更にワラワラと人が集まっていく。俺は冷めた目でそれを横目に見ると、自分の席についた。

仲間だと思ったのに…。

俺は端にある自分の席につくと、チラリと雫を見た。雫は群がる連中に愛想を振り撒いていた。そんなに仲間外れが嫌なのか？

朝、先生から雫が紹介され、その愛らしい姿に、男子は喜び、自分を可愛いと思ってるらしい少数の女子は恨めしそうに雫を見ていた。

…馬鹿らしい。

ホームルームが終わると、東がすぐに寄って来た。

「一ノ瀬君、雫ちゃんだよ！」

「ああ……」

俺は気のない返事をして窓の外を見た。只、空の上に浮かべればいいのになあと思った。

授業中も、俺は雫を観察していた。

ノートをガリガリ取っていたかと思えば、いきなり落書きに夢中になり、先生に怒られていた。それに懲りず、ウトウトと頬杖をついていたかと思えば、カクツと落ちて、ハツと目を見開いた。その姿に俺は喉の奥で笑った。変わってないな、と思った……あの日から。

あの日、祭りで見かけた雫は飛び抜けて輝いていた。

日本人にあるまじき、栗色の髪に、色素の薄い白い肌に大きな瞳。青い浴衣がそれを最大限に引き立てていた。あの日偶々、友達と来ていた祭りの中で蒼い蝶の後ろ姿を見つけたとき、俺の鼓動は煩いくらいドクドクしていた。

あんなんじゃない、変なのに捕まる。

考える前に身体が行動していた。

後で、考えたが、やはりあれは気まぐれだったと思う。

雫は俺に寄りつかず、俺の隣にいる東が手を振ると、小さく笑って振り返した。

「一ノ瀬君、帰らないの？」

東が夕日がかった俺の姿を見て言った。俺は、首を振ると、東と一緒に学校を出て、歩き出した。

校門の前に立っていた小学生らしい少女が手紙を渡して来たので、にこりと微笑んだ。

「ありがとう、でも悪いけど、いらないんだ」

そう言うと、少女は強ばった顔をして、俺の後ろへ駆けて行った。

「手紙くらい、受けとればいいのに……」

東の声に、ギロツと睨むと、東はビクリと身体を硬直させた。あの日の雫もそうだったなあ、と思った。

家に着き、部屋に入るとベッドの上に横たわった。東の言葉が脳裏を過る。

『手紙くらい、受けとれば良いのに…』

なんで、俺がいらぬ手紙を受け取らないといけないんだ？ 処分するのは、俺なんだぞ？ 俺の身になって考えてくれよ。

俺はポケットを漁ると、あの日渡しそびれたネックレスを見た。

薄むらさき色の小振りな石が埋め込まれていて、細工に凝っていると思う。せつかく、雫の為に買ったのに、渡した途端、突き返されてしまった。

「馬鹿だな…」

自傷気味に呟くと、誰もいない部屋に声が響いた。何だか虚しくなって、そのまま瞳を閉じた。

それから、二日が立ち、瞬く間に雫はクラスに馴染んでいった。雫の噂を聞きつけた他のクラスの奴等が、廊下から雫を覗いていた。

俺はククツと喉の奥で笑った。

あの愛らしい姿からは想像出来ないほど、意地っ張りで、怒りっぽい。他の奴等が知らない一面に一人顔を綻ばせていると、東が俺に囁いた。

「どうしよう、雫ちゃん。毎日、休み時間の度に、男子に呼び出し喰らってるみたいだよ…」

俺は、肩眉を上げて、チロリと東を見た。

「だから、何？」

東は、「え？」というと、オロオロしだして、「何でもないっ!」と、顔を背けた。

東の耳が赤い気がしたが、どうでも良くて、俺はふーんと言った。

また、10日が経ち、雫は男女ともに昼休みや放課後に度々呼び出されていた。なんとなく、顔色が悪い気がしたが、俺はアイツが自分から話しかけて来るまで、放っておくことにした。

しかし、雫は全くもって、俺とは目を合わせず、また五日、十日。そして二週間が過ぎた時には、俺の怒りは限界だった。

東の誘いを断って、俺は放課後、家に真っ直ぐ帰るのを止めて、夏に通っていた海の家に行った。

しかし、其処には誰もいなくて、帰ろうとしたとき、青白い顔をした雫が、海岸沿いを此方に向かって来るのを発見した。

4 デンファレ（後書き）

デンファレは夏の花。花言葉は、（わがままな美人）。透のココロを表しています。

5・ルコウソウ

蝉たちの騒がしい繁殖期は過ぎた。

この間、しばらく使っていなかった青い自転車をふと見ると、蜘蛛の巣が張っていて、蝉の抜け殻が無惨にも隣の自転車に潰されていた。

リンリンという鈴虫の声。秋が来たのだ。

私は酷く疲れていた。

夏の終わりに、ずっと海の家の際に置き去りにしていた父さんをやっとのことで、決心し、納骨することにした。

そして、遅くなった四十九日で、父さんの天国への路を照らした。

それを辛くも決心することが出来たのは、この海の田舎町に来たことが、大きいだろう。

初盆と、四十九日が重なり、親戚には憐れみの目で見られた。

それだけでも、十分疲れていたのに、二学期から私はオバちゃん家の近くの小さいアパートを借りて、一人で住んでいた。

オバチャンは止めたけど、誰かに頼りたくはなかった。

私は一人で生きていくんだ。

だけど、慣れない家事に、慣れない学校。

田舎の子供たちは元気に群がっていて、見てるとなんだか鬱陶しくなった。

ストレスは日に日に貯まっていった、もし豚の貯金箱があったなら、それはきつと溢れ反っているだろう…私の涙で。

…ずっと泣けなかった。

回りのおじさんやおばさんが、「可哀相」だと言う度に、私は白けた感情を抱いた。そのヒトたちの前では泣きたくなかったからだと思う。

変わりに、ココロに涙を貯金した。

だけど、私のココロは疲れきっていて、胸の辺りを擦ると、がっくりと頂垂れた。

…もう、海に還りたい。

自然と足が海に吸い寄せられて行く。

海の深いアオと私の哀しみの色いろが似ているからかもしれない。

海から生まれたんだから、私は海に帰るんだ。

学校帰りの制服のまま、海にバシャリと足をつけた。

夏の終わりの海は幾分冷えて、私を少し遠ざけている気がした。

そのまま、腰まで浸かったとき、急に後ろから腕を掴まれた。

煩いなあ、私を邪魔するのは誰だ。

振り向くと、嫌な予感はやっぱり当たって、一ノ瀬透がびしょ濡れで立っていた。

「…何？」

私は、そいつを冷めた目で見た。

いつもコイツが私を見てた目だ。

夏を通して、私はますますコイツのコトが嫌いになった。

あんなことが無ければ、トモダチにしてあげても良かったのに。

その証拠に一ノ瀬透は、カレからアイツ、そしてコイツに降格した。

あくまで、私の心の中だけだが…。

「死にたいのかっ!？」

そいつは、私の腕をギュッと締め付けると、無理矢理浜辺まで連れ戻した。

「違つよ、海に還るんだよ」

私がさも当然のように言うと、奴は、「はあ？」と言って、溜め息をついた。

そして、濡れた髪を掻き上げると、ジロリと私を見た。

「何処、行つてたんだよ、お前」

私はそれを一瞥し無視して、濡れた靴と靴下を脱いで歩き出した。

「おい、話かけてんだろ。何処、行くんだよ」

うるさい。キライ。大ッキライ。

夏が過ぎ、寂れた海の家の手口に回ると、濡れた服から鍵を引っ張り出し、ドアを開けた。

「オイッてば！」

何時までもつるさい害虫め。どうして私に群がって来るんだ。私は一ノ瀬透をギロツと睨んだ。

「着替えるの、あっち行つて」

そう言つて、私はピッタリ張り付いたシャツのボタンを外し始めた。突然、手が後ろから伸びてきて、その手を掴んだ。

そいつはその手をギュツと握った。何なんだよ、一体。

「離れてよ、変態」

私はそいつを振り払うと、外のシャワーで、ベタついた身体を洗い流した。

また邪魔されてしまった。私は只、海に帰りたいだけなのに。

機嫌が悪いままシャワーを終え、後ろを向くと、扉にバスタオル

が掛かっていた。

「
…」

私はそれで、身体を拭いて、海の家に置きっぱなしにしていたTシャツと短パンに着替えた。

外に出ると、壁に凭れた一ノ瀬透がいた。

「スケベ、変態、エッチ」

ありったけの厭味を言うと、そいつはムツとした顔をした。

いい気味だ。だけど…。

「タオル、ありがとね」

私はそいつの頭にタオルをかけた。きつと、外で待っていて寒かっただろう。それだけ言うと、家路へと歩き出した。

「お前さ、いい加減にしろよ？」

その声に振り返ったら、一ノ瀬透は眉を寄せ、怪訝そうな顔をしていた。

「何が？」

何が？何がいけないと言っただろう。私は一ノ瀬透をじっと見た。

コイツは、私に何かと突っ掛かって来るんだ。

きっと何か、何か、あるはず。私はただ、それが知りたかった。

「……」

だけど、一ノ瀬透は答えなかった。

ただ、私を睨んでいた。

邦彦君なら、すぐに何でも答えてくれるのに。

私は、チラリと奴を見ると、沈黙して歩き出した。

だけど、奴は何処までもついて来て、気づくと、自分のアパートの前まで来ていた。

こういうとき、何ていうんだっけ？そうか、『送ッテクレテアリガトウ。此処マデデイイヨ』って言うんだ。

言え、自分。

だけど、頼んでもないのについて来たコイツは只のストーカーじゃないのか？

私は、疑問と一緒に言いかけたお礼の言葉を飲み込んだ。

変わりに奴をジッと睨んだ。

「俺、帰るわ…」

奴はそう言つと、身を翻して、背を向けて歩き出した。

びつちより濡れた奴の背中なんだか寂しげに見えた。

何故か無性に何か、言いたくなった。ただ言葉が見つからなくて、もどかしくて駆け出していた。

気づくと、私は、大ッ嫌いな奴の腰にしがみついていた。

奴はギョツとして私を見た。

「雫！？ちよつと、離せよ！お前が濡れるだろ！」

だけど、私は離さなかった。いや、離せなかった。

奴の身体から父さんと同じコロンの香りが微かにしたから。

私はそのまま硬直して、凍りついた。

突如、涙が止めどなく溢れて来て、欠落した私の涙腺は崩壊した
ダムのように洪水を起こした。

私は父さんに会いたかった。

会いたかったのだ。

四十九日の間、ずっと我慢していたのに、何で今更壊れちゃったんだろう。

奴は、ぐちゃぐちゃの私を見ると、またギョツと目を剥いたが、そのまま暫くの間、抱きしめてくれていた。

私たちは無言のまま別れた。

部屋に入ると、ガクツと腰が抜けて、青ざめた。

ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ。奴に泣き顔を見られてしまった。

泣くつもりなんて、無かったのに…。

5 ルコウソウ（後書き）

ルコウソウは、夏に咲く小さな白い花。花言葉は、（おせっかいな人・私は忙しい・常に愛らしい）。雫と透の心を表しています。

6 ペンステモン

朝起きて、制服に着替えて、トーストとスクランブルエッグを作ったのだが、時間を見ると、そろそろギリギリで、パンを口に押し込んで、仕方なく私は部屋を出た。

鍵をカチャカチャ掛けていると、何故か足元に同じ学校の指定靴が見える。

パンをかじったまま、ゆっくり顔を上げていくと、其処には訝しげな顔をした一ノ瀬透が立っていた。

私は、それを横目に奴を通り越すと、急いで階段を降りて、駆け出した。

「おいっ！なんで逃げるんだよ！」

後ろから声がする。

左手の腕時計を見るとあと二十分。飛ばせば、間に合う。

駐輪場に止めていた自転車のロックを外していると、奴は荒い息を上げながら、私を睨んだ。

「まだ、間に合う。乗れよ」

そう言うと、青い自転車に跨がって、後ろを指した。それ、私のチャリなんだけど…。

仕方なく、私は後ろに跨がって、奴の腰に巻き付いた。

あーあ、家なんて教えるんじゃないかと、今更後悔しても遅い。

余裕で学校に着いて、奴は自転車の鍵を返した。

「帰りも送るから、待ってるよ」

なんだ、その命令形は。

ムスツとした表情で、教室に入ると、和夏ちゃんが私に寄って来た。

「零ー！見たよっ。ラブラブじゃんっ。」

そう言っで、嬉しそうに頬をつく和夏に、私はきよとした顔をした。

「何が？」

「またまた、惚けちゃってさあー。一ノ瀬君と付き合ってるんですよ？」

きやつと顔を赤らめる和夏に、全く意味が分からなくて、私は教室を見渡すと、一斉に皆は顔を背けた。

「え…？付き合っつて、どっいうコト？」

私が訝しげな顔を見ると、今度は和夏が間の抜けた顔をした。

「えー！！付き合ってないのっ！？」

その声に、また一斉に視線が集まり、和夏は口ごもると、私を教室の端へと引っ張った。

「てつきり、付き合ってるのかと思ったよ。ほら最近、雫への告白も少ないしさあ?」

告白と、聞いて私の瞳は淀んだ色になった。

愛は壊れる。脆い。だから、キライ。

「雫ちゃん、一ノ瀬君と付き合ってるの?」

邦彦が寄って来て、前の学校の通学鞆をギュッと握っていた私に話しかけて来た。邦彦君は、質問にいつも答えてくれるから、スキだ。

「なんで、私が一ノ瀬君と付き合うの?スキじゃないのに」

苛ついて少し冷めた口調でそう言つと、邦彦が私の後ろを見ながら、ヒツと小さく漏らした。私の声が怖かったのかと思ったが、違つた。

何故なら、私の背にゾクリと寒いモノが走ったからだ。

「…今はね」

私の肩に手を置いて、一ノ瀬透は笑った。それを聞いた女子諸とも男子さえも頬を赤らめた。

今だって、これからだってあるはず無いのに！！

私は、奴を教室の外へ引っ張って怒鳴りたくなる衝動に駆られた。なんとか、それを堪えると、キッと奴を睨んだ。

「…私は誰とも付き合わない」

出来るだけ穏やかな声で言っただけ、邦彦はそれを聞いて「え？」で顔した。

奴は席に戻る際に、私の耳元で囁いた。

「君は俺を好きになるって言ったでしょ？」

カッとなって奴を睨んだが、一ノ瀬透は口角を上げただけだった。和夏ちゃんは嬉々とした表情で私を見ていたが、私は一日中不機嫌だった。

早く家に帰りたい。

私は、帰りのホームルームが始まる前に、鞆に荷物を積み始めた。

「あれ？ 雫、もう帰る用意してるのー？」

和夏は私の行動を見て、不思議そうな顔をしていた。

「うん、ちょっとね」

「用事でもあるのー？」

和夏は顔をにやけさせて私を見た。不愉快な感覚が私を襲ったが、私は笑顔を貼り付けた。

「ううん、早く家に帰りたいだけだよ」

有無を言わせない表情だったらしく、和夏は、それ以上追求して来なかった。

私は、チャイムと同時に教室を出た。和夏はギョツとした顔をしながら、私は振り返らなかった。

奴が来る前に、帰らなくては。

急いで、駐輪場に行くと、其処にはまだ誰もいなかった。

ほっと息をついて、ポケットに手を伸ばした。しかし、有るはずのもの無い。ないではないか！

その代わりに、堅い何かを見つけ、それを引っこ抜くと、夕日を浴びて煌めくライラック・ピンクのネックレスがシャラツと揺れた。

私はギョツとして目を剥いた。

何で、コレが…。そう思ったとき、後ろから声がした。

「探し物はコレ？」

私は、ゆっくり振り返った。全身が硬直していたと思う。

其処には、黒髪に切れ長の瞳をした一ノ瀬透が立っていた。

サーと青ざめて、それを奴の手から奪い取ると、自転車のロックを解いて、その場から瞬く間に逃げ出した。

怖い。恐い。コワイ!!

どうして奴は私の身の回りに現れるんだろう。私は自転車を必死で漕ぎながら、後ろを振り返った。

坂を下って行った時、足が纏れて私はそのままひっくり返った。

宙を舞い、ふわりとした浮遊感が漂う。

しかし、次の瞬間、ガシャンという鈍い音がして、私は地面に叩きつけられた。

残った音は、自転車の車輪がカラカラ回る音だけだった。

痛みには慣れていたけど、これは結構痛かった。痛む身体を押さ

えながら、私はハツとして、自転車を見た。

青い自転車の籠は醜く歪んでいた。

私はショックで暫く放心していた。

父さんに買って貰った自転車が…。

私はガクリと項垂れて地面で拳を握りしめた。涙が汗に滲むのがわかった。

「そんなに痛いのか？」

その声に、顔を上げると柔らかそうな茶髪をしたキレイな顔の男のヒトが立っていた。

私は、涙を拭って立ち上がった。

「違っんです、自転車が…」

彼はチラリと私の自転車を見て、ああと頷くと、私の頭を撫でた。

「君、西山中の子でしょ？俺も其処の三年なんだ。自転車なら、俺が直してあげるから、ついておいでよ。俺ン家、坂の上だから。それより、まずその傷をどうにかしないと…」

私は頷いた。自分の体はどうでもいいけど、父さんの自転車を直して貰える。

彼は、一ノ瀬楓と言った。何処かで聞いたような気がしたが、耳に入らずに、私はただ呆けていた。

だって、彼は瞬く間に私の自転車を新品の如く直したから。

その上、彼の家は凄く立派なお屋敷で、私は啞然として口を開けた。

童話に出てくるお屋敷みたいだ。赤煉瓦のその建物はだいぶ年季が立って、蔦が絡んでいた。

それがまた良い味を出していて、感嘆の声を漏らした。

私は通学鞆を握りしめて、庭のベンチに座った。

父さんも建築家だった。きっと生前、父さんだって凄いお屋敷を立てたはずだ。

彼は額の汗を拭うとくしゃっと微笑んだ。何処と無く誰かに似ていた。

「雫ちゃん、お茶飲んで行きなよ」

彼は私の足に赤チンを塗りながら言った。痛みで、身体がビクッと震えた時、冷たい声がした。

「雫？なんで、家にいんの？」

私はゲツと、リビングの扉を見た。其処には、一ノ瀬透が間抜けた面で突っ立っていた。

しかし、私と楓さんを見て、猛烈に怒った表情をすると、彼を押し退けて、私の治療を شدした。

ポンポン容赦なく叩くので、消毒液が傷口に浸みて、始終私は痛みに身体を震わせていた。

なんて、酷い奴なんだ。

堪えかねた私に、楓さんがハーブティーを淹れて来てくれた。

「ありがとうございます。あの…、一ノ瀬…あつ、透君のお兄さんなんですか？」

その言葉に、一ノ瀬透は目を見開いた。なんだ、どうしたんだろ
う。

「ああ、うん。透の彼女？」

その言葉で、私の顔は強張った。

「…まさか、只のクラスメイトですよ」

そう言つと、楓さんは何故か嬉しそうな顔をした。

私は、お礼を言って、一ノ瀬家を出た。そうか、お兄さん…。

全然、似てない。顔も、性格も。

何処と無く顔は似てるんだが、性格は正反対だ。

楓さんは、あんなに優しいのに、奴は飛びきり意地悪だ。

きっと、良いところは全部、楓さんが吸い取っちゃったんだ。

私が、自転車を押しながら海岸沿いを歩いていると、後ろから一ノ瀬透が走って来た。

「…送るよ。足、痛いだろう？」

怪我したのは、アンタのせいだよ、とばかりに睨んだが、奴は私の自転車を横取りすると、私を自転車の荷台に乗せて、自分も跨がってペダルを漕ぎ始めた。

私がいい、と言っても奴は無言で漕ぎ続けた。

風が強くなり、私はギュッと奴の腰を締め付けた。

しかし、それが仇となった。

顔に当たる背中が思ったより広いのに気がついて、ふいに私は頬を赤らめた。

離したいのに、離せない。

だって、この手を離したら、私はまた宙を舞い、固いアスファルトに打ちつけられる。

この手を離すのと、地面に這い蹲るのと、一体どちらがいいだろう？

結局、答えは出ないまま、私は家に着くまで、奴にしがみついていた。

6 ペンステモン（後書き）

ペンステモンは秋の花。花言葉は、（あなたに見とれています）。
一体、此は誰の心でしょう。それは、読者様と作者のみぞ、知る秘密です。

7・トリトマ

チャイムが鳴り、黒板をつるさくチョークで叩いていた先生が、腕時計に目を落とした。

それと同時に、皆ガヤガヤと動き始める。

「じゃあ、この問題は次までに予習してくるようにつ」

騒がしい話し声の中で、先生の怒鳴り声が上がった。

ノロマな返事と、不満げな声に続き、ブーイングが起こったが、先生は「どうせ、やる気もないくせに……」とでも言いたげに、生徒たちを一瞥すると身を翻して教室を出て行った。

もちろん、私は後者だったが、先生の物言いたげな表情に気づいたのは、数人だったのではないだろうか。

隣の男子生徒がうーんと、伸びをして席を立った。

今日の沸点^{ポイント}は、何処だったかな。

私は、筆記用具を片付けながら、そんなコトを考えていた。

力の入りすぎでチョークが二度ほど折れたのも、傑作だったが、何よりウケたのは、白いチョークを赤いそれで塗りつぶした偽チョークを使ったときの、苦虫を潰したようなセンセイの表情だったかもしれない。

恐らく、「しまった」と思ったときには、既にどつと笑いが起こり、センセイは耳まで真っ赤にして恨めしげに生徒たちを睨んでいた。

午前中最後の授業が終わって、無駄に落書きがされたノートと教科書をパタンと閉じると、大きな声が鼓膜に響いた。

「栗ちゃん！」

廊下から響く声に、私は振り向いた。

其処には、にこやかに笑って、手を振る楓さんがいて、歩み寄って、私は呆けた顔で尋ねた。

「楓さん、どうしたんですか？」

楓さんは楽しそうに笑うと、私の背中を押して、席まで押し戻した。

状況が理解出来ずに、楓を見ると楓は隣の椅子を引いて、私と和夏席の間にうんしょっと腰を下ろした。

頭に浮かぶ？（ハテナ）マークに、私は首を傾げた。

楓は購買で買ったらしいパンの山を鞆から出して私と、紙パックを両手に突っ立ったままの和夏を見て朗らかに笑った。

「皆で食べた方が美味しいでしょ？」

確かにそうなのだが、自分にも友達がいるだろうに。

和夏が啞然としたまま、紙パックを私に手渡した。

たぶん、自販か、購買で買って来たのだろう。

「はい、栗のぶん…」

「ありがとう、和夏ちゃん。後で百二十円返すね」

お礼を言つて、弁当の蓋を開くと、焦がしてしまった玉子焼きをもぐもぐ食べた。

砂糖を入れたのに、何故か苦い。

和夏は、やっぱり放心したまま、口を開けて楓を見ていた。

異様な沈黙が私たちを包み込んでいた。

私は菓子パンについている応募シールを嬉しそうに、指で引っ掻いて剥がす楓をじっと観察した。

一体、何に応募するつもりなんだろう？

一体、何を考えているのだろうか？

楓さんという人間は、実に興味深い人間だ。

人間観察の実験体としては…。

無意識に、近くにあった紙パックを掴んで、ストローを口に含んだ。

しかし、吸い込んだ途端、突然、甘ったるい味が口の中に広がって、危うく噴出しそうになった。

予想外の出来事だった。

それをぐっと、堪えて小さく呻いた。

在らぬ器官に入ったのだろう、鼻の奥がツンとした。

ゴホゴホ咽ながら、鼻を摘まんだが、今度は圧迫されて息が出来なくなった。

「あつ、雫。それ私のイチゴ牛乳…」

和夏がそう呟いたときには、既に私は目を充血させて、隣に置い

てあった自分（ウーロン茶）の紙パックを引つ掴み、甘いイチゴミルクを喉の奥に流し込んでいた。

「…しっ、死ぬところだった!!」

ゼイゼイと荒い息を上げながら、まだイチゴミルクの感触が残っている口元を拭った。

先に言っ、欲しかった…。

「大丈夫、零？」

何とか頷くと、楓が不思議そうな顔で私を見ていた。

和夏が背を擦ってくれて、段々落ち着きを取り戻した。

「ありがとう、和夏ちゃん。もう、大丈夫だよ。ごめんね、勝手に飲んで…」

「いいよ、代わりに烏龍茶ちよつと頂戴？」

「栗ちゃん、甘いのが苦手？」

和夏を見て頷いたが、楓の問いに、私は首を振った。

首が疲れる。首振り人形じゃないのに…。

人間の意思表示は難しい。

「いや、むしろ好きですけど、玉子焼きの後にいちご牛乳は…ちよつと」

その言葉で、回りに笑いが起こって、センセイよりも恥ずかしい思いをしてしまった。

きつと、私が咽た辺りから、皆注目していたのだ。

私のお陰か、いちご牛乳を此处に置いた神様の仕業なのか、とにかくソレで場が和んだ。

私は息をついて胸を撫で下ろしたが、自分の行動が理解できずに頭を捻った。

そうこうしている内に、案の定、昼休み半場になると、廊下に何人かの上級生が楓を迎えに来た。

数人がニヤニヤしながら、口笛と冷やかしの声を上げた。

「おい、楓ー！自分だけ、後輩に囲まれてイチャイチャすんなよー！つか、お前がいないと、暇だし。なあ、今からサッカーしに行こうぜっ！！」

楓は顔を綻ばせて、突然立ち上がると、私の腕を引いて、上級生の前まで引っ張って行った。

遊び盛りなのは分かるけど、私まで巻き込まないで欲しいのだが……。

「楓さん？」

上級生たちは、私を見ると、パッと顔を輝かせて、次に顔をにやけさせた。

「なんだよ、お前のコレか？」

そう言って、男子生徒は、小指を突き立てた。

男子生徒の軽率な態度が感に障り、その小指をウォーターカット
―でスライスしたくなった。

しかし、とんでもない答えが楓の口から飛び出して、私の思考回
路は停止した。

「うん、俺の彼女だよ」

楓は、男子生徒の言葉に、私の首に腕を回すと、「ねー？」と微
笑んだ。

「…楓さん!？」

私はギョツと楓を見た。

「アハハ、冗談だよ」と笑う楓についけなくて、引き攣った顔で笑
った。

「冗談に思えない。」

あの性格……。やはり、兄弟だなあと思って、げんなりした顔で教室の端を陣取る一ノ瀬透を見た。

奴は目が合うと、にやりと笑った気がして、私はまた顔を引き攣らせた。

一体、全体、何でこんなことになるんだろう。

私は、右を見て、左を見て、もう一度、右を見た。

「何？何か用事？」

一ノ瀬透は冷めた目で私を見た。

しかし、その手はしっかり握られていて、どんなに振っても解けなくて、泣きそうな顔で、左を見ると、楓さんがにこっと笑った。

「どうしたの、栗ちゃん」

どうしたもこうしたも、この手は一体、何なんだ。

二人は、放課後、ホームルームが終わると、突然、私を抱き抱え、青い自転車とともに掻っ攫って行った。

気づけば、楓さんが私の自転車を押しながら、透は私の右手を握って、歩き出していた。

私は引きずられたままに、此处まで来て、改めて周囲を見回した。

スーパー帰りの近所のオバサンと、帰りがけのサラリーマンや、高校生が、物珍しげに私たちを見ていた。

は…恥ずかしい。

カッと身体が暑くなり、私はそのヒトたちから視線を逸らすと、じつと地面を睨んだ。

「あの、突然どうしたんですか？」

私が暫くぶりに口を開くと、楓は顔を顰め（しかめ）させた。

「あの時、俺がいたのに、雫ちゃんに怪我させたでしょう？だから、せめて怪我が治るまでは送るよ」

私はチラリと、右を見た。

「それは、わかるんですけど、なんで透君まで…」

私の言葉に、透は先程にも増して、痛いくらいに強く握り絞めた。

眉を寄せて、困った顔で楓さんを見上げると、「さあ？」の一言で済まされてしまった。

回りの視線に痛たまれなくなつて、私は悲鳴を上げた。

「だっ、大丈夫です！一人で帰れますっ！それに、今日は寄るところがあるからっ！」

「そう、じゃあ俺たちも行くよ」

楓は本当に何処までもついて来そうな顔だった。

そう言われては、何も言い返せなくなって、私はオバちゃんの家と父さんの墓参りを諦めた。

それから毎日、楓は昼休みになると、私と透の教室にやって来て、和夏と私の間に座り、愉しそうに透を見ていた。

「楓さん、透君のことスキなんですネ」

私が呟くと、楓はパンを齧りながら、もごもと言った。

「まあ、殆ど二人だけの家族だから」

「え？」

私は楓を見たが、楓は笑っただけだった。

どういうことだろう、二人だけの家族って。

「楓先輩は、雫のコト、好きなんですか？」

和夏が瞳をキラキラ輝かせて、変なことを楓に聞いていた。

そんなこと聞いて、何の得があるんだろう。

「うん。好きだよ、俺。雫ちゃんのこと」

私は、口角を上げる楓を、ギョツとした顔で見た。

「楓さん、スキとか、キライとか。そんな簡単に言わないでください」

そうやって、簡単に愛を囁くから、脆くズタズタに愛は壊れてしまっただ。

それなのに、楓は笑った。

私の隣にいる和夏を見て、何か企んだような表情で、けどもオナナなら誰でも靡いてしまいそんな顔でにっこり笑った。

「和夏ちゃんは、俺のコト、好き?」

突拍子のないことを聞かれて、和夏は顔をボツと赤らめた。

何を言い出すんだ、このヒトは。

「えっ…えっ! いや…えっと…!」

和夏はあたふたしながら、忙しく目を動かし、私を見た。

どうやら助けて欲しいらしい。

「楓さん、和夏ちゃんをからかわないでください」

「アハハ。おもしろいね、君」

楓は、ぷつと吹き出すと、目元を拭いながら、私を見た。

笑い過ぎて涙が出るなんて、御めでたいヒトだ。

「雫ちゃんは、俺のコト嫌い？」

そんなコトを急に聞かれても、返答に困るのは、私だけではないだろう。

私は眉を下げて困ったように笑った。

「キライじゃないですよ？」

だって、父さんの自転車を直してくれたから…。

楓のコトは、トモダチにしても良いと思っていた。

「そっか、そう…。じゃあさ、透は？透のコト、好き？」

楓の言葉に、和夏が興味津々とばかりに目を瞬かせた。

楓も机に前のめりになり、机にへばり付いている。

何で、そんなことに興味があるのだろうと思ったが、透の顔が浮

かぶと手汗がどつと噴き出した。

…嫌いだ。

キライなのだ。

もつと言えば、大ッ嫌いだ。

私の心に無断で侵入してくる奴が…。

私は、奴が大ッ嫌いなんだ。

強く拳を握りしめると、伸びた爪が掌にくい込んだ。

「なんで、そこで透君が出てくるんです。私は、別になんとも思っ
てませんよ!!」

私の剣幕に押され、楓と和夏は、急に頬をひっぱ叩かれたような
表情で、顔を見合わせた。

「わかった。わかったから、落ち着いて…」

楓が、私の背を不意に撫でて、背がわずかに仰け反った。

「雫ちゃん？」

楓は、不思議そうな顔をしていた。

胸が何だかモヤモヤしたが、その先を考えたくなくて、私は教室の端へと視線を逸らした。

何故か、邦彦が一人で弁当を食べていた。

奴がいない。

さっきまで、其処にいたはずの一ノ瀬透が居なかった。

「雫？どうしたの？」

和夏は、上の空だった私の顔の前で、手を振った。

私は何故かカラカラの咽喉から、言葉を搾り出した。

「ヴぁ…、何でもない」

変な声が口から出て、私はそれを咄嗟に押さえて頬を赤く染めたのだが、急に外から大声がし、私たちは振り返った。

「楓ー！また、此処にいるよ。楓ー！帰るぞ」

楓の仲間たちが、楓の迎えに来ていた。

もう、お馴染みの光景だ。

「楓ー。お前、最近、付き合い悪いぞつ。幾ら彼女が出来たからってー」

男子生徒は私をじろりと舐め回すように見た。

父さんの目と同じ、狂暴で貪欲な眼差しだと思った。

「まあ、これだけ可愛いかったらなあー」

しかし、目を逸らすと楓の仲間たちはうん、うんと頷いた。

楓は私を覆い隠すようにし、男子生徒を教室の外まで押しやった。

「わかったよ。帰るから、あんまじつと見んな」

楓は男子生徒にそう言うと、振り向いて笑い、同時に明るい茶色の髪が光を浴びてサラサラ揺れた。

「栗ちゃん、今日も一緒に帰ろう」

彼の背に見間違えなのか、目の錯覚か、一瞬後光が差して見えて、私は瞳を見開いた。

胸の辺りに、今まで感じたことの無い、何かが湧き上がった気がした。

しかしその考えは、ストローを通してイチゴ牛乳とともに、私の口の中に吸い込まれて往った。

ジュースが空になっても、私は暫らく紙パックを押し潰していた。

まるで、其処にある何かを探るように、ストローがパックの底を
抉る、グギュルルルという音が耳に響いた。

7・トリトマ（後書き）

トリトマは秋の花。花言葉は、（胸の痛み）です。疼く胸を表現しています。

8・アカイロ

放課後になって、楓が私のもとにやって来た。ふと、教室の端を見たが、そこに奴はいなかった。

「雫ちゃん、帰ろうか」

楓は顔を綻ばせると、私の左手を掴んで、歩き出した。視界に邦彦が入った。

「雫ちゃん、コレーノ瀬君に渡してくれる？」

邦彦はプリントを数枚握りしめていた。楓を見て、少しビクついてたが、私と目が会つと引き攣った笑みを浮かべた。

私は首を捻った。

「え、どうして？」

「ーノ瀬君、体調悪いって帰っちゃって…。雫ちゃん、いつも一緒に帰ってるでしょ？」

私の頬はヒクツと震えた。

一ノ瀬透、お前のせいで変な誤解をされそうだよ。

楓は、それを邦彦の手からゆっくり引き抜いた。

「いいよ、俺が渡しとく。一応、兄貴だから」

「ねっ」、と私に同意を求めたが、そう言われても頷くしかなかった。

一体、このヒトは何がしたいんだろうか。

もうとつくに怪我は治ってしまったのに、楓は毎日私のもとにやって来て…。

透と一緒に私の送り迎えをした。

潮の匂いがして私は顔を上げた。

気づけば、今年の夏に通っていた海の家付近だった。

楓は、私の手を引くと、灯台がある出っ張った埠頭まで連れていき、自転車を止めて、乾いたテトラポットの上に座った。

「んー気持ちいい！雫ちゃんも、此方に来て座りなよ」

潮風に揺れて楓の髪がサラサラ揺れた。

そして、心地よさそうに目を閉じて伸びてから、灰色の地面をポンポン叩いた。

私は頷くと、膝を抱えて其処に座った。

潮がテトラポットの下にぶつかって弾けては、それを繰り返している。

カモメが鴉のような鳴き声で灯台の周りをくるくる回って、小さなカニが足元を這い、触覚に人感センサーがあるのか、フナムシたちは、ウジャウジャと岩陰に隠れて入った。

私は遠くを見つめ、海の静寂しじまに耳を傾けた。

久しぶりの海だった。

この頃は、楓と透が私にベッタリ貼り付いて、私に自由がなかったから。

大きく息を吐き、海の匂いを鼻一杯吸い込んだ。

途端、私の中を海が駆け巡り、私はその身体を握りしめた。

父さんの墓参りに行きたいな…。

楓はそんな私の背を撫でた。

私はビクリと跳ね上がり、驚いて楓を見た。

「雫ちゃんは、海が好きなんだね」

私は目を見開いた。

そう、私は海が好きだ。

心の底から、海と同化したいと望んでいる。

「楓さんも…海、スキですか？」

楓はくしゃつと笑った。

「うん。スキだよ。海も雫ちゃんのコトも」

私はドクドクなる胸を抑えながら、楓を見ていた。

楓の瞳は、狂気と憂いを孕んでいて、テトラポットに片手を着き、私の頬をゆっくりなぞった。

頬を冷たい潮風と、それを撫でる楓の手からぬくもりが感じられた。

私は呆けて楓を見ていたが、彼の目は、私の知らない男のヒトの顔だった。

「雫ちゃん、俺と付き合わない？」

彼はそう言つと、私の手にその手を重ねて、至極真面目な表情をしていた。

「楓さん…冗談言わないでください…」

眉を寄せて、睨んだが、私の身体は震えていた。

いつも優しい楓が違つヒトに思えた。

走つて逃げ出したくなる衝動に駆られたのだが、彼は只、それを見つめていて、それから海に向き直ると、言葉を紡ぎ始めた。

「雫ちゃんは、男のヒトが嫌いだよね…。俺も嫌いなんだ」

楓は寂しげに笑つた。

「…嫌い？」

「うん。栗ちゃんは俺のコト嫌いじゃないでしょ?」

私はゆっくり頷いた。

楓は優しく、くしゃっと笑う笑顔が、私は好きだった。

「透のコトは、何とも思っていないんでしょ?」

私はまた頷いた。

私は奴が嫌いだ。だって、私の世界に無理矢理侵入してくるから。

「…そして、君は俺に似ている。男のヒトが嫌いなら、徐々に慣れていくべきだよ」

私は楓をじろりと見た。

このヒトは、一体何を考えているのだろう。

確かに、私は男のヒトがキライだし、女のヒトもキライだ。

「だから、俺と付き合おう?。」

楓は、私の顔を覗き込んだ。

茶色い髪が夕日に照らされて、キラキラ光った。

私は無性に彼の髪に触れなくなった。

ヒカリだ。彼は光なんだ。私の暗く、深い深海を照らす細い一光だ。

「でも、楓さん。私、まだ貴方のコト、あまりよく知りません」

私は、伸ばしそうになった手をギュッと握った。何かが、変わるうとしている。そんな気がした。

「今から、ゆっくり知ればいいんだよ。付き合うなんて、そんなもんだよ」

当たり前のように、楓は言う。

付き合う。恋愛。結婚。

何処^{トコ}が、何が^{ナニ}、違うんだろう。

付き合うコトは、スキじゃなくても出来るっていうコトなのだろうか。

でも、父さんと母さんは愛し合ってなかった。

だから、別れたんだ。

所詮、愛なんてそんなモノなんだ。

「だけど、私…。愛なんてわかりません。付き合うコトがどういうことなのかも。何をするのかも…」

楓は口をぱっくり開けて、間抜けた顔で私を見た。

私は、只、俯いていた。早くこの場から逃れたかった。

「雫ちゃん…付き合ったコト、ないの？」

私は、その声に顔を上げた。楓があまり間抜けた顔をしていて、私はクスツと笑ってしまった。

「楓さん、顔…」

楓は、私の手をギュツと握って、顔を輝かせていた。

「そう、その顔だよ。笑顔だよ！君はもっと笑うべきだっ！」

力強く豪語されて、私はびっくりして、身体を仰け反った。

「…楓さん！？」

楓は、私の身体を引き寄せて、優しく抱き締めた。

「雫ちゃんには、笑顔が似合うよ…」

耳元でそう囁かれ、楓のトクトク鳴る心臓の音が聞こえてきた。

何故だか、異様に疼く私の胸を誰かに掻きむしって欲しかった。

「…ねえ、駄目？」

楓は、憂いの瞳で私を見ていた。

何だか、ヘンだ。どうしてこんなに胸が疼くんだろう。

だから、オカシくなった私は、コクリと頷いた。

「…考えておきます」

そう言つと、彼は顔を綻ばせて、笑った。

私は彼の胸に抱かれながら、ずっと下を向いていた。

顔を上げる勇気がなかった。

だって、私の顔は何故だか、火照っていたから。

8 アカイロ（後書き）

赤いチューリップの花言葉は、（愛の宣言）。チューリップを匂ったことがありますか？鼻にフワツと広がる微かに甘く可憐な匂い。今回は、重要な話なので、季節は関係ありません。雫の成長を温かく見守って頂けたら幸いです。

9 ダリア

私と楓さんは、ドラッグストアに寄って飲み物やお菓子を買った。

あと、栄養ドリンクと解熱鎮痛剤も。

その買い物袋を私が持とうとすると、楓は私の手からそれを優しく奪った。

「女の子が重たいモノ持つちゃ駄目だよ」

そう言って、私の自転車の籠の上にのせた。

それは、彼が持ったことになるのだろうか。

それとも、私が持ったことになるのだろうか。

とりあえず、私は笑った。

暫く無言で歩き続け、気がつくと目の前には、一ノ瀬家が着いた。

何故、此処に私がいるかというところ、一ノ瀬透のお見舞いに来たのだ。

私は奴が嫌いなのに、何故かって？

それはもう、私の隣の人物の弛んだ顔を見ればわかるだろう。

「透も、きっと喜ぶよ」

口元を弛ませて、楓は私を家の中へ導いた。

いや、なんで奴が喜ぶんだ。

私は此処に、無理矢理連れて来られたのだが…。

私は広いキッチンに入り、さっき買ったモノたちを並べた。

「楓さん、冷蔵庫の中身使っていいですか？」

既に、開け放たれた冷蔵庫から顔を上げると、楓はにっこり笑って頷いた。

お菓子と飲み物やらを中に整頓された冷蔵庫の中に押し込むと、私は野菜室をあけて、薩摩芋と葱を取り出して切り始めた。

「何作るの？」

楓は、オープンキッチンの向こうから、嬉しそうに此方を見ている。

「ただのお粥ですよ。私、大したもの作れないんで」

「作れっってくれるだけ嬉しいよ」

私は曖昧に返事をして、料理に集中した。

鍋に火を点けて切った薩摩芋と冷ご飯とミネラルウォーターを入れて煮込んでいたら、後ろから誰かに抱き締られた。

びっくりして振り向くと、楓がニヤニヤと締まりのない顔をしていた。

「きっと、良い奥さんになるよ。雫ちゃん」

「何言ってるの、楓さん。私は誰とも結婚なんてしませんよ」

私はムツとして、楓を睨んだ。

知ってるくせに、私が誰もスキになんてならないコト。

階段から、ガタゴト降りてくる音がして、リビングのドアに顔を火照らした一ノ瀬透が入って来た。

ひどく顔色が悪く、咽こみながら、壁に凭れていた。

「ゴホッ…ゴホッ!…雫、来てたのか」

ヤジロベエのように大きくグラついた身体を、私は急いで駆け寄って抱き止めた。

額に手を当てると、燃えるように熱かった。

「一ノ瀬君、酷い熱だよ」

私は青い顔をして、透を見ると、透はゆっくり頷いた。

「ほら、上に上がって寝てな」

楓は透の肩に手を回すと、奴を二階へと運んで行った。

私は何故だか、奴のコトが心配だった。

すっかり冷えてしまったお粥を前にして、私は小さく蹲っていた。

「雫ちゃん、もう帰る？送っていくよ」

窓の外を見ると、すっかり闇に溶け込んだ群青色の空が見えた。

私は力なく首を振った。

「透が心配？」

私は顔を上げて、楓を見た。

瞳には心配そうな顔をする私がゆらゆらと揺れながら映っていた。
私は首を振った。

「だいぶ熱、下がったんだよ。病院に連れて行こうとしたけど、いっていつからさ。頑固なんだから」

楓は腕を組んでムスツとした顔をした。緊張が少しほどけて、私は立ち上がった。

「もう、帰ります」

そう言おうとしたのに、彼は薬箱を開けて仰天した顔をしたから、私も驚いてそれを覗き込んだ。

「どうしたんですか？」

「薬が全然ないんだよ。おかしいなあ、最近買ったばかりなのに」

楓は首を捻って、棚やら机の上やらを漁り出した。

「それなら、さっき買った解熱鎮痛剤が…」

手を伸ばして、キッチンの上を見たが其処には何も無かった。

「あれ…、さっきまで此処にあったのに…」

私も首を捻って、楓を見た。

既に楓は、財布を持って外に向かうところだったので、私は焦って玄関まで追いかけた。

「何処行くんですか、楓さん」

冗談じゃない。他人の家で、留守番なんて。

しかし、楓が玄関のドアを開いたとき、凄まじい勢いで家の中に風雨が駆け込んで来た。

私は目を見開いた。

群青色だったはずの空は、暗黒色になっていて、暗い大きな雲が辺りを包んでいた。

「こりゃ、嵐が来るかもね」

楓はそう言いつと、カップを着込み、傘を差すと、外へと走り出した。

「え！？楓さん、嵐ですよ！」

私は彼の背中に叫んだ。

風が楓の傘を逆立てて、雨が凶暴かつ容赦なく当たり一面を叩きつけていた。

こんな中で外に出るなんて、命知らずもいいところだ。

「弟が風邪なんだ。兄貴がしっかりしなきゃ駄目だろ？薬、買って来るよ。すぐに、戻るから。透よろしくっ！」

彼は勇敢にも立ち止まって、それだけ言いつと、闇の中に消えて行

った。

「!？」

私は暫く放心して、楓が消えた闇の中を見ていた。

どうしよう。楓は戻って来るって言った。透をよろしくって。

私が奴の面倒を見なければ、楓さんはきっと悲しむだろう。

私はゆっくりドアを閉めると、キッチンに向かった。

恐る恐るテレビのリモコンのスイッチを入れてニュースを見ると、
どうやら台風9号が接近しているらしかった。

今頃、海の辺りはひどいことになっているだろう。

しかし、有難いことに、津波警報も強風注意報も出てはいなかった。

楓が無事に帰ってくるといいのだが。

いくらなんでも、此処まで来たら、私でさえ心配する。

ヒトの心が通っていれば、当然なのだろうが…。

重たい腰を上げて、冷えたお粥を温め、お盆の上に水とそれを乗せた。

カタカタと揺れるそれを押さえて、私は二階へと上がって行つた。

長い回廊は薄暗く、ヒトの気配がない上に、えらく不気味だった。

一番の原因は、窓からの何の光も得られないという演出のせいかもしれない。

部屋が一杯あって、どれが透の部屋なのか分からなかった。

私は一つずつノックして、ドアを開けた。

五つめのドアを開けると、ベッドの上がこんもり膨み、そこだけ温かな光が差していた。

私は、ベッドに近づいてベッドライトの横にお盆を置いた。

ベッドの上には、スーと寝息を立てて寝ている一ノ瀬透がいた。

結構気合を入れて此処まで来たのに、意外に拍子抜けだった、と私は思った。

「寝顔は、天使みたいなのに…」

厭味なほど健やかな額にデコピンをお見舞いすると、長い睫毛が小刻みに揺れ、透はうっとうしく呻いて、身を振らせた。

「此処に置いとくから。起きたら食べて…冷めない内に」

私は立ち上がって、身を翻した。

役目は果たしたのだから、後は下で待つてればいいだろう。

しかし、突然腕を引かれ、身体が傾いて気づけば透の上に跨がっていた。

「ねえ、食べさせてよ」

「起きてたの？いつから」

「最初から」

黒い暗黒色の瞳に映った自分自身を私は睨んだ。

甘かった。

こんなことで、奴が、私を解放するハズなんてないのに。

やっぱりコイツは嫌な奴だ。

でも、楓さんはコイツの面倒を見ろって言った。

脳内会議を早々終えて仕方なく、私は彼の上を下りて、ベッドの端に座った。

あーあ、なんで私、こんなことしてるんだろう。

熱いお粥を口でフーと冷まして、透の口元に持っていくと奴は上体を起こして悪戯に口角を上げた。

「口移しがいいな」

「絶対、ヤダ！」

私が睨むと奴は何かの呪文のように呪いの言葉をかけた。

「俺のことヨロシクって兄貴に俺のコト頼まれたんでしょ？」

様子を窺うような目が向いて、私はギョツと奴を見た。

「なんで知ってんの？」

「あんなにでっかい声なら、聞こえるって」

奴は汗で張り付いた髪を掻き上げた。頬が赤く上気してる。私は彼の額に手を寄せた。

「熱いよ。キツイ？」

透はコクリと頷いた。口移しなんてしたら、風邪が移るんじゃないだろうか。

「どうしても？」

「うん、どうしても」

彼があんまりせがむので、私は口の中にお粥を含むと彼の唇を覆った。

すると、ぬるりとした艶かしいモノが私の中に侵入してきて、私は彼の胸を押した。

「ん！ん！ん！ー！」

お粥はもうないってば。

私は奴の胸を強く叩いた。

私を力強く掴む腕はビクともしなくて、そのまま腕を引かれてベッドに転がされた。

奴は私を上から見ていた。私は幾分荒い息を上げながら、奴を睨んだ。

「ねえ、もう好きになった？」

奴はそう言って、顔を近づけて来た。

恐ろしくなって、枕を押し付けようと掴んだら、枕の下になんと、あんなに探しても無かった薬の山があるではないか。

一瞬、驚愕して言葉が出なかった。

しかし、沸々と込み上げてきた怒りで、私は奴を怒りを込めて睨みつけた。

「何で、コレが此処にあるの!？」

私は、透の鼻先にさっき買ったはずの解熱鎮痛剤を突きつけた。

「さあ、なんでだろう?。」

此処まで来てしらばっくれるなんて一体どんな神経してるんだろ
う?

「楓さんは、アンタの為に嵐の中で薬を買いに言ったんだよ!？」

私は、グシャリとその箱を握りしめた。

なんて、酷い奴。

「だって、雫がずっと兄貴といるから……」

私は透の行動に一瞬、怒りも忘れて、透を見た。

なんで、アンタが泣きそうな顔してんのよ。泣きたいのは、コッ
チなのに。

「私、一ノ瀬君のコト、心配してたのにつ！」

「…うん」

透は頷いた。私の瞳から怒りからか、ボロボロと涙が零れ落ちた。

「楓さんも貴方のコト、すぐ、凄く心配してたのにつ」

私は顔を歪ませて透を睨んだ。

最早、言い訳の余地もないのか、透はただ、私の言葉に頷いていた。

「…うん」

奴を無性に殴りたくなった。

だけど、ソレを必死で堪えていた。

しかし、透の次の言葉で、怒りが頂点に達し、私の中で何かが、音を立てて切れた。

「雫、俺が好きだって言つてよ」

私は、透の頬をありったけの力を込めて殴った。

バシッツと乾いた音が異様に部屋に響いた。

奴は冷たい瞳で私を見ていた。

だけど、その頬は真っ赤に腫れ上がっていた。

「アンタなんか…アンタなんか…アンタなんか、大ッ嫌いよっ!!」

私は透に怒鳴りつけると、部屋を出て、階段を駆け降りた。

一瞬、垣間見た透の表情はえらくショックを受けたかのように見えたが、それどころではなかった。

リビングルームに置いてあった自分の鞆を乱暴に掴んだとき、私は足から崩れ落ちた。

身体中を煮えたぎるような怒りが渦巻いていたのだが、足を止めた瞬間、鎮火されたように、燻り始め、やがて雨が降り始めた。

涙が小雨のまま、静かに私の制服のスカートを濡らした。

私は拳を固く握りしめていた。

透を殴った右手がまだジンジンして痛かった。

私はその手を掴んで恐怖に震えながら見つめた。

殴ってしまった。

父さんのように、私はカレを殴ってしまった。

ズシン、と重いその事実が重く押し掛かり、身動きがとれないように身体が重かった。

涙が止めどなく溢れて出し、私はポケットからライラック・ピンのネックレスを取り出した。

「ごめん…ごめん…なさいっ…ヒクッ…ヒクッ…ごめん…なさい…」

私は何度も何度も、誰かに向かって謝った。

その懺悔を一体、誰に聞いて欲しかったんだろう。

床が軋む音がして、私は顔を上げた。

其処には驚いた表情の楓が立っていた。

足元がビッシヨリ濡れて、片手に持った白いビニール袋から、たった今、帰って来たのだろう。

彼はショックを受けた表情から、なんとも言えないような複雑な顔に変わった。

ゆっくり近づいて、そっと私を包み込んだ。

まるで、壊れ物を扱うように、やんわりと細い腕が、私を囲っていた。

ここへ来るよな寒さの中で、温かいひとつのガス灯^{ランプ}がやって来たように、肌に熱が伝わった。

「ごめんね、遅くなって。怖かったの？」

まるで海の中にいるような気分になり、私は彼にしがみついて何度何度も頷いた。

彼は嗚咽を漏らしながら、涙でぐちゃぐちゃになった私の唇に顔を押しつけると、熱い熱いキスをした。

私は、そのまま彼に身を委ねた。

9 ダリア（後書き）

ダリアは秋の花。花言葉は、（不安定・気まぐれ）です。

10・ハギ

俺はつけっぱなしのテレビを前にして、寝間着姿でただ呆然として宙を見つめていた。

テレビから何やらザワザワと雑音が聞こえてくるが、自分の耳には入らなかった。

放心したまま、雫のコトを考えていた。

昨日、お見舞いにやって来た雫は仲良く兄貴と、料理をしていた。

俺の為に粥を作ってくれた。熱が下がるまで、此の家に留まってくれていた。

恥ずかしそうにしながらも、口移しでお粥を食べさせてくれた。

雫の最後の言葉が頭の中を何度も何度も駆け巡っていた。

『アンタなんか大ッ嫌い!』

そう言った雫は、ボロボロと涙を溢して、真っ赤な目で俺を睨んでいた。

火のようにチラチラと垣間見える瞳には、怒りが渦巻いていた。

俺はソファーに横になって、じっと天井を見つめた。

「雫の奴…何で、あんなに怒ったんだ？」

暫くして、玄関のドアがカチャカチャ鳴って、リビングに兄貴が入って来た。

横目でそれを確認すると、その顔は気持ち悪いくらいの満面の笑みで、俺は即座に顔を逸らした。

「透、体調はどう？」

楓は、ダイニングの机の上に鞆を乗せて訊ねた。

「ああ…うん。もう、だいぶ楽だよ」

俺は、上の空で答えた。

「透が風邪引くの久しぶりだな。お前のは、一年に一回ぐらいだから、行事に変わりにいよな」

楓はアハハッと笑いながら、上着を脱いで、椅子に座った。

こっちに向けられた瞳がランランと輝いていて、何だか気持ち悪い。

何か、良いコトがあつて、聞いて欲しいんだろう。

俺は仕方なく、兄貴に訊ねることにした。

「兄貴…、なんか良いコトあつたの？」

嫌々ながらそう言ったら、兄貴は待ってましたとばかりに、俺の近くにやって来て嬉しそうに顔を綻ばせた。

「付き合うコトにしたんだよ」

俺は肩眉を上げて、兄貴を見た。

「ふーん。良かったね。告白されたの？」

どうでも良くて、うつ伏せになると、俺は漫画を開いて読み始めた。

適当に流そう。

「んや、俺がコクったんだ」

楓は、俺の背をバシバシと叩いた。

痛い。

兄貴をギロツと睨んだ。

「あつ、そう。ハイハイ、良かった。良かった」

楓は、今度は俺の靴下をもぎ取り始めた。

何なんだよ、こんなにはしゃいでる兄貴は一体何時振りだろう。

「もう、本当に嬉しくて、嬉しくて。何度も口説いてたからさ、や
っとオッケー貰って…本当に俺さ、雫ちゃんのコト好きなんだ」

顔を赤らめて、しゃがみ込む兄貴の最後の言葉に俺は一瞬、固ま
った。

雫が…好き？

「兄貴、雫と付き合ってるの？」

俺はドクドクなる胸を抑えながら、質問した。

「うん、そうだよ。雫ちゃんすごく可愛いよね」

楓は、照れ臭そうな顔をした。

「雫は…兄貴のコトがスキなのか？」

俺は呆然としたまま、気づけばそんなコトを口走っていた。

そんなコトを聞いて、どうするつもりなんだ。

「んー。それは、まだ聞いてないなあ」

兄貴は、鞆から雑誌を取り出して、何でもないように答えた。

「え？付き合っつて…」

「うん。付き合うよ。彼氏と彼女だ。だけど、まだそんなんじゃない
いい」

楓は、机の上にあった煎餅をガジツとかじった。

「そう…なんだ」

俺はホッと息を吐いていた。

なんで、落ち着いてんだ、自分。

そうか、雫は俺と同じ匂いがするから、だから何だか落ち着かないんだ。

ただの仲間意識だ。

「ねえー、何処がいいと思う?」

楓は、俺に開いた雑誌のページを押しやった。

「何が?」

「初デートの場所だよ」

脈打つこめかみがある俺に知らせようとしていたが、俺はそれを見殺した。

苛立ちながら返事を返す。

「別に、何処でもいいんじゃない? そんなの兄貴が決めればいいだろ?」

もうこれ以上、付き合ってたらない。

俺は、ゆつくりと起き上がると、後頭部に両手を組んで歩き出した。

「やっぱり、海かなー。雫ちゃん、海スキだし……」

その声に俺は勢いよく振り返った。

「だっ、駄目だ！」

焦っていた。

この夏の思い出が頭を過った。

海に潜る雫。甘い唇。

雫を何かに取られそうな気がした。

楓は、きょんとした顔で俺を見た。

「どうしたの、透。やっぱり、まだ体調悪い？」

そうだ、体調が悪いんだ。なんでこんなに胸が疼くんだ。ヘンだ、おかしい。

俺は髪を掻き上げた。

「あ…うん。まだ、少し…悪いかも…」

「そっかあ。じゃあ、寝てな。やっぱり、海は止めようかな。もう、秋だし泳げないよね…」

その言葉に、ホッと息を吐いたとき、床にキラリと光る何かを見つけた。

俺はそれをつまみ上げた。

「俺が…あげた…ネックレス…」

光る薄紫色の石は、何だか寂しげで、それをギュッと握りしめた。

「ふふつ。早く土曜にならないかな」

俺はゆっくり二階に上がり、そのままベッドに倒れこんだ。

ミシッと軋む音がした。

「また…受け取って貰えなかった…」

一体、何故こんなに雲に執着しているんだろう。

俺は雲に何を望んでいるのだろうか。

俺は瞳を閉じた。

これ以上、何も考えたくない。

そのまま、意識が遠退いて逝った。

二日後、ようやく学校に登校したとき、雫は俺をチラリとも見なかった。

ずっと、兄貴と一緒にいた。

二人で笑いあっていた。

俺は一日中雫を眺めていた。

三日分の、エネルギーを補充するように。

「…雫ちゃん、楓先輩と付き合ってるんだよね」

東が何だか泣きそうな顔で俺を見ていた。

「ああ、兄貴がそう言ってた…」

「一ノ瀬君は、何とも思わないのっ!？」

荒い声に俺は驚いて東を見た。

どうして怒るんだよ。

「東？何、怒ってんの？」

東がキツと俺を睨んだ。

こいつが怒るのは、本当に珍しい。

「だって、雫ちゃん、楓先輩のモノになっちゃたんだよ？」

違う。雫は、誰のモノにもならない。強いて言えば、海のモノなんだ。

「…付き合ってるだけだろ？」

楓と雫の声が聞こえる。耳を塞ぎたかった。何も聞きたくない。

「雫ちゃん、明日明いてる？」

「あ…はい。明いてますよ?」

ハッと楓を見た。兄貴は、デートに誘うつもりなんだ。

雫は何も知らず、純粹無垢な顔で、楓を見上げていた。

「何処か行きたいんですか?」

雫はクスリと笑った。

「うん!雫ちゃん、コスモスの丘に行こうよ。今はね、コスモスが満開でキレイなんだって」

「誰に聞いたんです?」

ちょっと困った顔をして雫は楓を見た。

「わぁーっ!雫、初デートだねっ!うらやましいっ!」

山辺和夏の声に雫は、ボツと顔を赤らめた。

「ちっ、違うよっ!」

慌てて手を振る雫に、楓は少しふて腐れた顔をした。

「…違うの？俺とじゃ、イヤ？」

「えっ…ちがつ…違うない…です…」

その声は段々、小さくなり、やがて雫はうつ向いた。

「何だよ、あれ…」

俺はガンツと机に頭を打ち付けた。

なんであんなに恥ずかしそうな顔してんだよ。

「一ノ瀬君？」

俺は窓枠に正確に嵌まった空を見上げた。

その中を蜻蛉が横切った。

何だか無性にその窓を壊したくなった。

10・ハギ（後書き）

ハギ（萩）は落葉低木。秋の七草の一つ。花言葉は、（物思い）。

11・秋桜

カチャカチャ…

トントン…

シャカシャカ…

ピンポーン

私は、ハツとして、顔を上げた。楓さんだ。楓さんが来た。私は
急いで玄関へ駆けて行き、ドアを開けた。

「はあ…はあ…楓さん、おはようございます」

「し、雫ちゃん、その格好…」

楓はギョツとした顔で私を見た。ゆっくり顔を下に下げると、私は
薄いタンクトップと、短パンという霰もない姿だった。

「あ…すいません、こんなカッコオ、で…」

私はモゴモゴと言った。口には歯ブラシが刺さったままだった。

「アハハッ！ 雫ちゃん面白い…クック…」

楓は涙をうつすら浮かべて笑った。そんなに变かな。

「どうぞ、中へ。まだ準備出来てなくて…」

楓は困った顔をしてポリポリと頭を掻いた。

「駄目だよ、雫ちゃん。まだ着替えてないでしょ？」

「え…ああ。いいですよ、別に。気にしないんで。それより、外で待たせるの悪いですし…」

「俺が困るんだよ」

楓は、私を無理矢理部屋に押しやると、ドアを閉めた。

楓さんなら、別にいいのに…。それより、待たせる訳にはいかない。

大急ぎでクローゼットから、青い花柄のワンピースを取り出して、鏡の前で髪を高く一つに結んだ。

ピンクのリップグロスを軽く唇に塗って、ピーコックグリーンの鞆を肩に掛け、お気に入りの白のミュールを突っ掛けると、部屋から飛び出した。

「すいません、楓さんっ。待ちました!？」

楓は驚いた表情で、携帯から顔を上げた。

「しっ…栗ちゃん。まだ、五分も立ってないよ」

「え、そうなんですか。良かったあ…」

私は胸に手を当てて、ホッと息をついた。

「ていうか…、栗ちゃん」

楓は目を右往左往させて、言い淀んでいた。

「何ですか？」

言いたいことは、はっきり言えば良いのに。楓さんらしくない。

「可愛い……」

楓は、顔を押さえて、顔を逸らした。えっ……えっ？

「あっ……ありがとうございます、ます」

それは私にも感染して、頬が火照るのがわかった。

「行こっか、雫ちゃん」

楓は私に手を差し出した。

「……ハイ」

私もその手をとって歩き出した。

駅に着いて、切符を買った。電車を乗り継いで行った先は、とある街の中心地だった。

「楓さん、何処行くんですか？」

隣を歩く楓を見た。私は何も、聞かされていなかった。ただ、「水着を持って来て」以外は…。

「まだ、秘密つ。着いてからのお楽しみだよ」

楓はふふつと笑った。何だか腑に落ちないまま、仕方なく楓について行くことにした。

それから、バスに乗って、小一時間経った頃、都会の喧騒を抜け出して、綺麗な紅葉が目飛び込んで来た。

私は、目を見開いて、窓に貼り付いた。

「楓さんっ！紅葉っ！」

瞳をキラキラさせて言うと、楓は嬉しそうに頷いた。

バスを降りるとそれからまた、凄いモノが目に飛び込んで来た。

彩り鮮やかな秋の花が花のアーチを作って私たちを待ち構えていた。

「すごいっ！楓さん、エデンの園みたいっ！」

楓は、うんうんと頷いた。

私は、はしゃいでいた。何処かに出掛けるのは、本当に久しぶりだった。

両親は、私が物心ついたときには、仲が悪くて、何故、麻由と私が生まれたのか疑問を抱いたほどだった。

それでも、二人は私と麻由の為に、仲を取り繕っていた。しかし、

小学五年に上がった頃には、母さんは帰りが遅くなり、父さんは食事中、全く話さなくなった。私は、幼い麻由の面倒を一人で見た。

突然、背中に手が当たって、私はビクリと跳ねた。

「栗ちゃん、ようこそ、エーデルワイスの園へ」

楓はおどけた表情で、それからにっこり笑った。

「エーデルワイスの園…？」

「うん。初恋の思い出って意味だよ」

私には、全くもって関係ないことだ。だけど、この花のアーチは魅力的だった。

「温水プールもあるんだよ、行きたい？」

「えっ！行きたいっ！行きたいですっ！」

思わず、何度も首を縦に振った。

温水プールなんて…なんて、良い響きなんだろう。

「ふふつ。じゃあ、その前にお昼にしよう。お腹減ったでしょ？」

無意識に、私は鞆を触った。中には、朝早く起きて作った弁当が入ってる。

どうしよう…言おうか、言っまいか…。いや、言わなきゃ。

「あ…楓さん」

「何？」

楓は、マップから顔を上げた。

「お弁当、作っただんですけど…」

それを聞いた途端、楓の顔が輝いた。

「ホントに！？作ってくれたのっ？」

「え…あの、楓さんこないだ、作ってくれるだけで嬉しいって言うてたから…」

「嬉しいよっ！栗ちゃんが作ってくれたらならっ」

肩をガクガク揺さぶられて、脳ミソがぐるぐる回る。

「ふぁいつ、わかったから…」

「あっ、ごめん。つい…」

楓は私の様子を見てパッと手を離れた。

「室内プールの中で、食べようか」

私は頷き、手をとって歩き出した。

「栗ちゃんの手は、小さくて柔らかいよねっ」

楓はふにふにと、私の手を触った。

「…楓さんの手は、大きくて、ゴツゴツしてて、指がすごく長くて…なんかオトコのヒトって感じですね…」

その手を見ながら、私は冷静に観察結果を述べた。

「怖い？」

楓が私の顔を覗き込んで聞いた。不思議と怖くなかった。楓の手は私の手にしっくりきた。

「怖くないです、楓さん優しいから…」

楓は肩眉を上げ、訝しげな顔をした。

「ヒドいなあー。俺も一応、オトコなのにつ」

楓はプウと頬を膨らませた。その姿が、何だか子供みたいで可愛い。

「楓さん、変な顔しないで」

「そうだつ、雫ちゃん。水着持ってきた？」

水着は、一着しか持っていない。

「学校の奴を……」

楓は顔を顰めさせた。えっ？なんか、変なコト言った？

「雫ちゃん、コレ着て」

何やら、紙袋を押し付けられた。有無を言わせない瞳だったので、仕方なくそれを受け取った。

私は、浮き輪の上に座って塩素たつぷりのプールの上をぷかぷか浮いていた。天井をじっと睨んでいたけど、そこには満天の青空はなくて、無機質な白い壁。

小さな窓から覗く青と光はあまりにも少なかった。ぼーっとして
いた私に、楓さんがプールサイドから声を掛けた。

「栗ちゃん、もういいの？こんなにおいしいのにつ」

楓は、右手にタコさんウィンナーを左手に玉子焼きを持って、口
を尖らせていた。

「お腹減ってないので…。あつ、ちょっと探索してきてもいいです
か？」

私は、ふと見つけた洞窟ゾーンを横目で見た。

「いいよ。でも、あんまり遠くに行っちゃダメだよ？」

楓は訝しげな顔をしていた。「すぐに、追いかけるからね」と聞
いて、私は頷いた。

浮き輪に掴まりながら、その洞窟に泳いで行った。

そこは、しんと静まり返っていて、薄暗かった。回りが青緑の発光色で蛍のお尻のように光っていて、私はすぐに心奪われた。

「わぁーっ、すごい…」

誰もいない洞窟の中に私の声だけが響いた。不意に、蛍光が切れ真っ暗になり、私は辺りを見回した。

「…何っ!？」

自分の声だけが暗闇に虚しく響く。

突然、恐怖が襲ってきた。この世界に自分は一人…取り残されてしまったのではないかと。

まるで、何の音もしない寂れた我が家の中にいるように。

誰か、誰か…私を！

そんなことを願っていたら、本当に後ろから腕が伸びてきて、私は身体を硬直させた。

誰…？後ろを振り向こうてしたけど、動けないように、ギュッと抱き締められた。

「大丈夫だから…もう、震えるな」

耳元で囁かれる声にドツと力が抜けていった。そのとき、初めて私は震えていたことに気がついた。

何処かで聞いたことがある声に私は安心して、そのヒトの胸に身を任せた。

「雫ちゃんっ！雫ちゃん！！大丈夫っ！？」

私の意識が戻ったとき、目の前には、心配そうな顔をした楓さんがいた。

夢だったのだろうか…全て。

私は、呆然としたまま上体を起こした。

「ダメだよ、雫ちゃん。そんな格好で、こんなところで寝てちゃっ」

楓は、ビシッと私を指差した。下に目をやると、ピンクのストラップが入ったフリフリの水着。確かに、これではお腹が冷える。

私は困った表情で楓を見た。

「…すいません」

眉を寄せて、楓を見たら、その腕に包まれた。

「心配したんだよ、雫ちゃんを追いかけて行ったら此処で倒れてたんだから…」

楓はその手に力を込めた。

「倒れ、て…?」

「そつだよ、具合悪いなら言ってくれなきゃ分かんないよ…」

そんな筈はない。私は今日、機嫌も体調も絶好調だった。気づかぬ内に、疲れていたのだろうか。

「ごめんなさい…楓さん。もう、大丈夫ですよ…」

私はその手をゆっくり剥がした。楓は、少し傷ついた表情をしたが、取り繕うように笑った。

「あんまり、心配させないでね」

シンパイ？

「なんで…楓さんが私を心配してくれるんですか？」

私は頭に浮かんだ疑問をそのまま述べた。シンパイとは、気がかりで、相手の面倒を見るコト。相手の世話をするコト。楓が私を気にかける理由は一体、なんだろう。

「恋人でしょ？彼氏が彼女のコトを心配しちゃいけないの？」

コイビト…？一応、私は楓さんの彼女なんだっけ？ということは、

私は楓の心配もしなければ、いけないのだろうか？

「…楓さん、すみません。シンパイかけて。迷惑でしたよね…」

俯いて答えると、楓はポンポンと頭を撫でた。

「楓…さん？」

「いいよ、もう許してあげる。俺が君を一人にしたから、怖い思いをしたんだよね。あの日も、今日も…俺はなんも学習してない…」

…違うっ！楓さんのせいじゃないのにつ！あれは、アイツのせいだ。これは、私のワガママで…。落ち込んで、背を向けた楓さんの背を抱き締めたくなった。

だけど、なんだかそれは出来なくて、私はその背に声をかけた。

「楓さん、もう大丈夫だから…」

『もう大丈夫だから…』

きつとアレは楓さんが言ってくれた。私を安心させたその呪文を繰り返した。

ゆっくり楓は振り返ると、小さく笑った。その瞬間、心臓がドクンツと跳ねた。

へんだ、絶対へんだ。どうして、私は楓さんに、笑って欲しいと思うのだろう。

彼はいつも太陽の下でキラキラ輝いて、日溜まりみたいなその存在に、私はいつも触れなくなる。

楓さんのせいで私は……。

誰も教えてくれない答えを胸に抱えたまま、その気持ちを胸に押し込めた。

「早く、早くっ、雫ちゃんっ」

楓は、丘の上から私を見下ろしていた。当初の目的だった丘に着

いたのだ。

園内にあるとは言え、私はプールに入っただ後の倦怠感で、身体中がずっしりと重かった。

なんで、楓さんは、あんなに元気なんだろう。

「楓…さん、待って…下さいっ」

私は、はあ…はあっと荒い息を吐きながら、やっと楓の横に並ぶと、膝に手をついた。

「…疲れた」

楓は、私の背をポンポンと叩いた。不思議に思っ、楓を見ると満面の笑みで笑って、指差した。

「…見て、栗ちゃん」

その指の先を辿って行くと、色鮮やかなコスモスの花が草原の上に何処までも続いていた。

私は啞然として口を開けた。

「か…楓さんっ！すごいっ！！」

「ねっ！」

そう言って、笑う楓は夕日に照らされて、キラキラしていた。

嗚呼…このヒトは、なんて輝いているんだろう。

頬が赤らむのを感じた。

それを隠す為なのか、なんなのか、コスモスに近づいて、私は其処にしゃがみ込んだ。

目の前には、一輪のコスモスの花。風に揺れて、そのカラダをしなやかなにくねらせている。

「…花は、強いですね」

私はコスモスを見つめながら言った。別に誰に話しかけた訳でもないけれど、楓さんは「え？」と、私の独り言に返事を返してくれた。

「雨に晒されて、風に吹かれても、軟らかいカラダでしなやかに、柔軟に、かわすでしょ？…尊敬しちゃう」

私は楓を見た。楓は、私の隣にしゃがみ込むと、困った顔をして笑った。

「それは、雫ちゃんだよ。しなやかで、奥ゆかしくて、愛らしい」

「…愛らしい？」

「雫ちゃんはさ、俺の光なんだよ。俺と透の両親はさ、小さい頃から仕事、仕事でさ…いつも家に居なかったんだ。だから、今でも透の面倒は俺が見てるんだ」

そう言った楓は少し寂しそうな顔だった。

「私は光なんかじゃありません…。光なのは楓さん…」

楓と目が合ったとき、二人は真っ赤だったと思う。

「雫ちゃん……」

楓さんの顔がゆっくりと近付いてきた。私は目を閉じて、楓を待った。柔らかい唇が私のそれに触れた。

嗚呼……私は、幸せだ。このとき、私はそう思った。楓さんがいてくれれば、何もいらなにかもしれない。

涙が零れそうになったけど、私はグッと力を込めた。

それから、何も話さず、ただ手をずっと繋ぎながら、私たちは歸路につき、やがて私の家の前で別れた。

私は夕食を作りながら、人参を切っていたその手を止めた。

「そういえば……、楓さんの両親……。……ということは、アイツも……?」

私は自分の考えていることに首を振った。

別にシンパイしてるんじゃない。

ただ、あの時の…家で見た今にも泣きそうな透の顔が、まだ忘れられなかった。

11・秋桜（後書き）

花言葉は（乙女の心・乙女の純潔・真心・美麗）です。 雫の純潔を表しています。

12・リコリス

「若竹煮、きのこ汁、五目煮豆、小松菜の白あえ、お稲荷さんに、なすといんげんの揚げ出し、それから…」

「栗ちゃん、コレものさまにお供えしてくれるー?」

その声に、私は机の上に並んだ料理を指差しながら、振り返った。

「なーに? あつ、おはぎだつ! オバちゃんのおはぎ大好きっ! コレ、いつ食べられる?」

私は嬉々として、オバちゃんの顔を覗き込んだ。オバちゃんは、ニターと気味の悪いくらいの顔で笑った。

「栗ちゃん、最近よく笑うわねえ!。此処に来たときは、死んだみたいが無表情で、何も喋らなかつたのに。さては、彼氏でも出来たなあーっ。あつ、わかった! バイトで来てた一ノ瀬君でしょっ!」

私はギョツとオバちゃんを見た。危うく、おはぎを落とすところだった。

「おっ、オバちゃんっ！違うよ！アイツなんかじゃないよっ」

私がオドオドして答えると、オバちゃんは「あらまあー」と言つて、私の頬を指でつついた。

「最近、来ないと思ってたらー。やっぱり、彼氏が出来たのねっ。うふふ…っ。いいのよ、良い傾向じゃない」

茹で蛸みたいに耳まで真っ赤になった回りを手の平で仰いだ。顔が燃えるように、熱い。何処かで叫びたくなるほどに。

「まあまあ…今度、連れて来てね。一応、保護者なんだからっ。それ、早く上げちゃって。節句のお菓子です。どうぞっって言ったら、すぐ下げちゃっていいから」

そう言つて、オバちゃんは台所に入つていった。私はその小さな背中を見ていた。

オバちゃん、寂しいこと言わないでよ…。私には、オバちゃんしかいないのに。俯きがちに、仏壇の前まで歩いていき、少々強めにと鐘を叩いて、手を合わせた。そこに、おはぎを置く。

視線の先は亡き父の遺影。誰にも明かせない想いを此処で晴らすのだ。

「…父さん、オバちゃんが寂しいこと言うんだ。私には、もうオバちゃんしかないのに…」

仏壇の前で、虚しく自分の声だけが響く。父が生きていたときでさえ、こんなことは言えなかったくせに。居ないと分かるとこんなにも、素直になれる自分になんだか腹が立つ。

母方の祖父母は、音沙汰なし。父方の祖父母は、京都に住んでいるのに、手紙も無かった。勿論、母さんから…。麻由はどうしてらんだろう。元気かなあ…。

気づけば、涙が溢れて来ていた。私は、皆に嫌われてる。

楓さんも、私の過去を知ったら、私のことを嫌いになるだろうか。楓さんとは、せつかくトモダチになれて、少しずつ私のココロの氷を溶かしてくれているのに、今、嫌われたら私…。

父さんが死んだとき、家の回りには野次馬がいつぱいいた。死んだ父さんに、一日中しがみついて、異常なまでに執着していた私を近所のヒトは白い目で見っていた。

「なんか、あの子気持ち悪いわねえー」

「死体にしがみついていたなんて、本当は、殺したのあの子じゃないの？」

「可哀想にねえ、まだ小さいのに…。旦那は、妻にも逃げられて…まるで昼ドラだわ」

「でも、現実を起こってるんだから、ちょっと面白いわよねえー」

顔を寄せ合って、ヒソヒソ話し合う声が聞こえて、私はオバサンたちの前まで大股で歩み寄ると、忌々しいその顔を睨みつけた。

「…なっ、何？お嬢ちゃん…」

私の視線に勝てないのか、目を泳がすオバサンたちに怒鳴りつけた。

「うるさいっ！ー！くそ婆アツ！何も知らないくせにっ！何も分かんないくせにっ！」

オバサンたちは、ギョツとして目を剥いた。私が怒り露に手を振り上げたとき、誰だか知らないオジサンに羽交い締めにされた。

それでも私は泣きながら、オバサンたちに思いつくだけの暴言を吐いた。

「父さんは、母さんをアイシテたっ！だから、全然カワイソウなんかじゃないんだっ！…ウツ！止めてっ！離してよっ！ウツ…ウツ…バカア…皆、皆、クライだ…ウツ…ヒクツ…父さん…父さん…会いたいよおっ！」

それを見ていた回りのオバサンたちは、目を背けた。現実から。ドラマなんかじゃない、クリアな世界を感じて目を背けたのだ。

「やいつ！人殺しっ！」

頭がガンツと鳴って、血が額に垂れた。私はそれを私に投げつけたガキを睨んだ。

「お前の父ちゃん、死んだんだって？お前がコロシたんだろっ！母ちゃんが言ってた。お前の父ちゃん、母ちゃんに逃げられたんだろ？だから、カワイソウな父ちゃんをお前がコロシてあげたんだって」

ガキたちは、ギャハハハと笑いながら、私を見た。まるで、自分たちは人殺しなんかしない良い子なんだって言うように、上から見下した。

「うるさいよっ！あんたたちもコロシてあげようかつ！」

私は、スクールバッグを頭の上に上げると、ガキたちはヒィッと仰け反った。

「母ちゃんに言ってやるからなっ！」

ガキたちは捨て台詞を吐くと、散らばっていった。私は、その手をゆっくり下ろした。

「人殺し……か」

うつ向くと、血と涙が滲んで服に垂れていた。

それから、オバちゃんに引き取られて、初めて私に会ったとき、オバちゃんは私を見て笑った。

「あらあー、可愛いっ。お人形さんみたいねえっ。覚えてるかなあ？ 雫ちゃんが四歳ぐらいのとき、オバちゃん家に、1ヶ月くらい居たのー？」

私は、首を振った。途端、オバちゃんはハッとして私の髪を掻き上げた。

「どうしたの、この怪我っ！！近所の子にやられたの！？」

私は首を振った。違う。やられてなんかいない。悲しくなんかない。私はあいつらを睨んで、追い払った。だから、私は弱くなんかない。オバちゃんが私をギュッと抱き締めた。

「雫ちゃん、オバちゃんのコト、家族だと思って良いからね。辛いコトがあつたら、何でも言ってね」

オバちゃんを見上げると、オバちゃんは悲しそうな顔で微笑んでいた。

ナンデ…？

オバちゃんは、本当に良くしてくれた。部屋に引きこもっていた私を、私の哀しみが落ち着くまでそっとしておいてくれた。

私は、それでもオバちゃんが信用出来なくて、オバちゃんが作ってくれたご飯を食べなかった。

一週間、立ったとき、さすがに起き上がる力も無くて、床に横たわっていた私をオバちゃんがゆっくり抱き起こした。

「…雫ちゃん、何か食べないと死んじゃうよ？」

私は力なく首を振った。

良いんだ、死んでも。父さんの元に行きたいから。死んでも一度、父さんに会いたい。

流れる涙をオバちゃんがそっと拭った。痩せ細ったカラダ。父さんから受けた暴力の痕。父さんが生きていた証。私はそのカラダを抱き締めた。

「雫ちゃん…。このお萩はね、雫ちゃんのお父さんが子供の頃、好きだったのよ…」

オバちゃんは、そう言って、私の前に、そっとお萩を差し出した。

粒が大きい綺麗に餡子にくるまったお萩。私は此処に来てから、初めて言葉を漏らした。その声は、久しぶりに誰かと話すせいか、か細くて、頼りなくて…。

「とお…さん？」

私が呟くと、オバちゃんはうんと頷いた。オバちゃんは泣きそうな顔をしていた。オバちゃんの手からお萩をとって、見つめた。

「父…さんの、好きな…おは…ぎ…」

オバちゃんは、またうんうんと頷いた。

私はその顔を見て泣き出した。そして、オバちゃんが作ってくれたお萩にかぶりついた。

「おいし…ヒクッ…ヒクッ…おい…しっ…」

私は泣きながら、お萩を食べた。その味は、当たり前だけどしょっぱい涙の味がした。

12・リコリス（後書き）

リコリスとは、お彼岸の時期に咲く彼岸花のことです。花言葉は、リコリス（悲しき思い出）。今回の話は、とても悲しいお話です。

13・リコリス

私は、泣きながらお萩にかぶりついていた。オバちゃんがその手をそつと掴んで、私の背中を撫でた。

「オバ、ちゃん…」

オバちゃんの顔のパーツが中央に集まり、眉はキツと吊り上った。

「また、一人で泣いているっ。辛いコトがあつたら、私に言つてつて言つたでしょ？」

オバちゃんは、呆けた顔をする私の背を力強く叩いた。おばちゃんの言動が時々わからなくなる。今もほら…

「彼氏クンに会つておいで。こういう時は、そういう人がいいの。お墓参りは、夕方に行くから、それまでには帰つて来てねっ。はい、コレ。お萩、お土産に持つて行きなさいっ」

「えっ！？ちよっ！オバちゃんっ！？」

私の解らない次元で会話をする。そしていつも上手いこと、丸め込まれてしまう。オバちゃんは、私の手にお萩が入った袋を握らすと、あれよあれよと玄関の外まで追い出した。そして、彼女はお得

意の笑みを浮かべた。ニンマリそう、そんな感じ。

「雫ちゃん、ちゃんとそのお萩、渡してくるまで、家に入れないからねっ」

目と鼻の先で楽園の扉が閉まった。私は啞然としてそのドアを見つめた。そして次に無理やり手に握らされた某デパートの古い紙袋を見た。たった一人、荒野に投げ出されたように、私は身一つ。

「ちょっと！オバちゃんーーーーー！」

私の声が虚しく空に響いた。

というわけで、今に至る。私は何故か、家でカレーアパートを作っていた。

レシピを片手に鍋の中をお玉で掻き回す。

「一口大に切った鶏肉、塩、ターメリック、カレーパウダー…クロ
ーブパウダー、にんにく、しょうがのみじん切り、ランペ、水、ガ
ルシニア、トマト…此处でココナッツミルク…ふむふむ」

携帯のバイブがブルブル震えて、私はそれをつまみ上げた。

「…はいっ、楓さんですか？」

「…」

あれ？返事が帰って来ない。先程、楓に電話して「お萩のお裾分けを…」と言った途端、電話の向こうから、怒号が響いた。

「栗ちゃん！？今ね、ドームのコンサートにいるんだ。無理矢理、友達に連れて来られてっ！！えっ？何、そうだよ。黙っててっ！あっ、ごめん、お萩？嬉しいっ！んと…、すぐに行くから、待っててとりあえず、遅くなるといけないから、透に行かせるね。分ったってばっ！！ごめんね、栗ちゃん、待っててっ」

私は啞然として頷いた。あつ、頷いても、相手には見えないんだ。

「わ…わかりました、待ってます…」

「うんっ、本当にごめんね」

「あつ…はい。じゃあ、後で…」

それから暫くしてかかってきた、ナウなイタズラ電話に苛立って怒鳴りたくなった。

私は、肩眉を上げて、怪訝な表情で電話の向こうの人物に話しかけた。

「…透君？」

暫く沈黙があつて、奴の声がした。

「カレー…ホントに作ったの？」

「えっ!？」

私は、ギョツとして、窓の外を見た。其処には、人影。

「…今、玄関の前」

透の冷たい声が、携帯と、窓の外から聞こえた。私は、ドアを開けた。其処には、不貞腐れた顔をした一ノ瀬透が立っていた。

「一ノ瀬君が、言ったんでしょ。カレー作ってくれなきゃ、御使い行かないって…」

私が睨むと、透は鼻をふんと鳴らした。ム力つく奴だ。

「ホントに、作るなんて、お前：バカじゃないの？」

その声に、奴を睨んだが、喉まででかつかた言葉を吞み込んだ。

「上がって…一ノ瀬君…。カレー…すぐに出来るから…」

今、此処で怒ってしまったら、オバちゃんとの約束が果たせない。楓さんにお萩を渡す。私には、その使命があるのだから。透は怪訝そうな顔で私の横顔を見たが、黙って靴を脱ぐと、私の部屋に侵入した。

透は、私の部屋を一通り眺め、感想を漏らした。

「…何、コレ？」

私は、部屋を見たが、何処にも変なところはない。

棚の上には、ガラスで出来た薔薇のレストに、ミヤコワスレの絵柄のトンボ玉、の絵柄の花瓶に、ペンステムンのグラス、マーガレ

ットのお皿。壁には、ジキタリスの押し花。勿忘草を描いた絵。

壁に立て掛けた色鮮やかなステンドグラス。ブーゲンビリアのカーテン。

桃の花を描いたベッドシート。キッチンに置いてあるのは、胡蝶蘭のカップが二つ。床に敷かれた絨毯には、リンドウが描かれていた。

「何？どうしたの？」

「…全部、花ばっかじゃんか」

ギョツとして私を見る透。私は、眉を寄せて、一ノ瀬透を睨んだ。

「悪い？全部、父さんの遺品なんだから、カレー溢さないでね」

私の言葉に一ノ瀬透は、一瞬固まった。

「お前…父親いないの？」

その言葉に私はハッとして口を噤んだ。

まずいつ。コイツには嫌われて構わないけど、楓さんにこのコトが伝わってしまったら。今更、「冗談でした」なんて言っても奴が私を逃がしてくれるとも思えない…目を泳がしていると、一ノ瀬透はゆっくりと、キッチンの椅子に腰を下ろした。

「…別に、誰にも言わないよ。俺ん家の両親も死んだようなものだから…」

私は透を見た。透は、無表情だった。

「…一ノ瀬君の、両親もいないようなもんだって…楓さんが…」

透は一度だけ頷いた。

「俺は、お袋も親父も嫌いだよ。昔から、家に寄りつかないし、最後に会ったのは、いつだっけ…ああ、三年前の正月かな…」

それっきり、透は口を開かなかったの、私はカレーをついで透の前に差し出した。

…寂しそうな顔。私、誤解してたのかな。

「…一ノ瀬君にも、ニンゲンの血が通ってたんだ」

心で、思ったコトをつい、口に出していて、私と透はギョッとその顔を見合った。

「お前…俺のコト、そんな風に思ってたの？」

私はギクツと腰を引いた。ヤバイ…完全に怒らした。しかし、予想外にも透は私を見て吹き出した。

「…ヘンな顔っ」

「え？」

慌てて頬に手を当てたら、透は顔を綻ばせて笑った。

「雫、カレー食べても良い？俺の為に作ってくれたんでしょ？」

まあ…一応、そうなんだけど。頬が引き攣る。

「…俺、カレーにはうるさいよ?」

口角を上げてニヤツと笑う透にキツと睨みつけた。

「私だって、カレーは得意なんだからねっ」

その挑戦、受けて立とうじゃないか。私は、カレーを口に運ぶ透を凝視していた。透はカレー口に含むと、口に手を当てて、呻き声を漏らした。そして、涙目で私を睨む。

「しっ…っ。俺を殺す気が…」

悶えながら言う透に私は首を傾げた。いつも通りに作ったはずなのだが…。

「…あれっ? そんなはずはないんだけどなあ…。スパイスが足りないのかなあ?」

私は台所の上にあるガームマサラと、七味唐辛子を掴むと、透のカレーに加えようとした。しかし、透は化け物でも見るような目で私を見た。

「…雫、そんなに俺が嫌いなのかっ!？」

「…え？」

私はその手を止めた。いや、別に嫌いでもないんだけど…。私は、カレーをパクツと食べると、頬に手を当てて微笑んだ。

「なんだあーっ！美味しいじゃんかーっ」

透は、私を「何なんだ、コイツは」とでも言いたげな顔で私を見ていた。

「美味しい？激辛じゃんかっ！っていうか、コレ人間が食べれる味じゃないしっ！辛すぎるにも程があるだろっ！」

透は、コレは人外のモノだ！と豪語して、机に手をついた。私はカツと頭に血が上り、透の皿を奪った。

「じゃあ、もう食べないでいいよっ！私が食べるからっ！」

ムツとした表情で、透を見ると、透は顔の前で手を振った。

「いや、食べるっ！食べるから、返してっ！雫が俺を思っ作って

くれたんだから、残す訳ないだろっ！」

あんまり、慌てた顔だったので、私はプツと吹き出した。別に其処まで言ってないし。

「じゃあ、食べて。その代わりに、七味とガームマサラ追加ねっ」

透はギョツと私を見たが、大人しく私でも火を吐く、激辛カレーを食べ出した。目に涙を浮かべた表情がなんだか可愛い。私は、俯くとさっきの話題をぶり返した。

「この花はね、全部…父さんが母さんに送ったモノなんだ…」

透は、その声に手を止めると、私を見た。私は首を振った。

「…いいよ、食べてて。独り言だと思つて。…父さんはね、母さんに一目惚れだったんだって。それで、熱烈にアタックして、やっと口説き落としたんだって…。いつも、いつも花の贈り物をしてたんだって」

私は、棚の上の薔薇のレストを指差した。

「薔薇の花言葉は、真実の愛。父さんが母さんに初めて送った贈り

物なんだ……」

次々に部屋中の花たちを指差す。

「ペンステラモン……あなたに見とれている。ジギタリス……熱い胸の想い。マーガレット……真実の愛。ブーゲンビリア……あなたしか見えない。桃……私の全てをあなたに。勿忘草……私を忘れないで。そして……」

私は、棚まで歩いて行き、リコリスを描いた小さなトンボ玉を透の前に置いた。

「リコリス……また会う日までって意味なの……」

私は困った顔をして笑った。透はただ私を見つめていた。

「……笑っちゃうよね。生まれ変わっても、また会えるなんて。父さんの愛が重すぎて、母さんは、去って行っちゃったんだよ。……もう、父さんは不器用なんだから。重すぎるってば……」

透は、私の手をゆっくり握った。

「……そんなコト、ないよ」

私は、ハツとして、透を見た。その時、玄関のチャイムが鳴った。私は慌ててその手を離すと、玄関のドアを開けた。其処には、額から吹き出る汗を拭う楓さんがいた。

13・リコリス（後書き）

今回、リコリス長編の為三話に分けられております。今回のタイトルとなる花言葉は、（思うはあなた一人）です。雫の父の一途な気持ちを感じているのでしょうか？実の所、私にも分からない；

14・また会う日まで

「はぁっ…はぁっ…ごめん、待った…？」

汗だくの楓さんを部屋の中に入れると、とりあえず、冷たい麦茶を差し出した。心内、私はまだ突然の楓の訪問に動悸で胸を抑えていた。

「ありがとっ…雫ちゃん…」

荒い息を吐いている楓は、顔を上げると一気に麦茶を飲み干す。
落ち着け自分…！

「はぁ…生き返るっ！わっ、すごいつ！雫ちゃんの部屋、可愛いねっ」

楓は瞳をキラキラさせて、私を見た。

「あ…あのっ、コレは…」

「…雫、花が好きなんだってさ」

言い淀んでいた私に透が助け船を出した。ハッとして、透を見たが、透は知らんぷりをしてカレーを食べていた。

「そうなんだ？」

楓は顔を綻ばせて笑った。いや、強ち違う訳ではない。花は好きなんだけど…。

「…あつ、はい」

私はそれだけ言うつと俯いた。

「楓さん、タオルいります？」

私は、急いで浴室に駆けていき、タオルをひっつかむと楓の前に差し出した。

「ありがとう。雫ちゃん」

楓の満面の笑みに心がチクリと痛んだ。嘘をついた訳でもないけど、なんだか…心苦しい。無理矢理笑みを創る。

「楓さん、カレーあるんですけどいります？」

「わあーっ！よく知ってたね。俺、カレー好きなんだっ」

楓は本当に嬉しそうに一瞬私を見つめ、私に勧められた椅子へと座った。私はカレーの中にヨーグルトと林檎と蜂蜜を＋（プラス）し、机に置いた。

「美味しそうっ！」

それを透がジロリと見ていた。バレたかな、甘口にしたコト…。私は冷汗を流して、楓を見ていた。

「…口に、合うといいんですけど…」

私がモゴモゴ言つと、楓はカレーを食べてパァーッと顔を輝かせた。

「美味しいよっ！零ちゃんっ」

私は顔を綻ばせた。

「良かった…」

透の刺さる視線が痛くて、私は彼を盗み見た。

「…甘口」

その言葉に、私はギクリと身体を仰け反らせた。

「な…な…なっ！何かな、一ノ瀬君…」

挙動不審な態度をとっていると、透は小さく笑って、またカレーを食べ出した。私はホッと息をつき、椅子に座った。

まったく、一ノ瀬透がいると、いつも調子狂うなあ。まあ、お加減で今回は助かったんだけど…。

私は美味しそうにカレーを食べる楓さんの顔を暫くの間眺めてい

た。食べ終わると、楓はすぐに「じゃあ、お暇するね。カレーすごく美味しかったよ、ありがとう」そう言って扉へ向かった。

それから、楓さんにお萩を渡して二人をアパートの階下まで見送った。陽はすっかり傾いていた。私は一度、部屋に戻って、洗い物をしていたのだが、そのときチャイムが鳴った。私は首を傾げて、ドアを開けると、其処には汗だくの一ノ瀬透がいた。

「あれっ？忘れ物？」

私がそう言うと、透は頷いた。私は部屋を見回したが忘れ物らしきモノはない。怪訝な表情で、透を見ると、いきなり腕をグイッと引かれて、顔が近付いて来た。ギョツとした透の顔を手で押さえつけてガードした。そう、何度もホイホイキスされて堪るか。

二人の間で顔と顔が近付いたり、遠ざかったり、ギギツと骨がミシミシなる。私は透を睨んで声を絞り出した。

「…一ノ瀬君、なんでっキス…」

「…俺がしたいからだよ」

透がモゴモゴ言った。そのまま態勢を崩されて、壁に押し付けら

れて、股を足で割ると、私の頬を両手で掴んで、唇を乱暴に押し付けられた。

「ン　　ッ！」

いやいやと首を振ると、透の舌が歯列をなぞってカラダがビクリと震えた。

「ふぐ…っ」

しかし、声が漏れると、離れていって、透は私を見つめると触れるだけのキスをして、私の頭を軽く撫でた。

「…ごめん」

それだけ言うと、透は部屋から出ていった。

私はガクツと玄関のドアに手をついて青ざめた顔をした。

…キス魔だ。透といい、楓さんといい…キスをやたらにしてくる。二人はキス魔なんだ。

私は此れからの自分の行く末が恐ろしくなって、ドアを開けると透の背中に叫んだ。

「謝るくらいなら、キスしないでよっ！！」

透はギョツとして私を見た。それだけ言うと、バンツとドアを閉めた。

やっぱり、アイツは変態なんだっ！

私はその事実を確認して、顔を掴んだ。

「暫く、口聞いてあげないんだからっ」

私はカラダをギュツと抱き締めた。

私は、頬を膨らませて墓地を歩いていた。オバちゃんは、その顔をみて言い辛そうな顔をしたが、口を開いた。

「雫ちゃん…、一体何が…」

私は、ますます頬を膨らませた。

「私…、お萩渡して来てって言ったよねえ？」

私はチラリとオバちゃんを見た。しかし、オバちゃんは立ち止まると背後に黒いオーラを纏って笑顔で近付いて来た。私は、ギクツと腰を引いた。

「墓地でその顔…。オバちゃん、洒落にならないって」

オバちゃんは、私の頬を掴むと、横にグイグイと引っ張った。笑った顔が怖いなんて私、知らなかったよ、オバちゃん…。

「あーら、柔らかい頬なことつ。そんなこと言うのはこの口かしら。うふふふっ」

「あゝう…あうっ…あう…」

私がモゴモゴ言っていると、オバちゃんがパチンと手を離れた。急

に離された頬が真っ赤になって痛い。

「ヒドイよっ、オバちゃんっ！」

涙目で睨むと、オバちゃんは口角を上げて、ニィーッと笑った。
私はカラダを仰け反らせた。

怖い…。

「私、彼氏に慰めて貰いなさいって言ったわよねえ…」

私はウンウンと首を縦に振った。とにかく、オバちゃんの怒りを沈めなければ…。

「…で、それは、出来たの？」

私は首を横に振った。するとオバちゃんは恐ろしい形相で私を睨んだ。

「…雲ちゃん」

「はひっ！」

オバちゃんの低い声に私の声が裏返った。

「…まあ、泣いてないから、良いでしょう」

そう言つと、オバちゃんはニパツと笑った。身体力がドツと抜けた。

知らなかったよ、オバちゃん。怒ると母さんよりも怖いなんて。

「ほら、雫ちゃん軽くはわいちゃって」

横を見ると、其処には父さんのお墓があつた。私はオバちゃんから箒を受けとると、回りを徹底的に綺麗にしてから、墓石の上に手桶の水をかけた。冷たい水は、父さんの喉を潤わせてくれるだろうか。父さん…来たよ。私は、心の中で思った。

花瓶の水を入れ替えると、すっかり枯れた花を取り除き、白、黄、紫の菊の花を挿した。

オバちゃんが火をつけた線香から煙が立って臭いがしてきた。ちらちら見える赤いところが、まるで父さんの命のようだった。オバ

ちゃんと一緒に手を合わせた。

「…栗ちゃんをこれからもお守り下さい」

オバちゃんの小さな声が聞こえる。父さん…、私忘れてないよ。最近はお来なかったけど、毎日父さんを思わなかった日はないよ。生まれ変わっても、父さんの子供になりたいな。

しゃがんで祈っていた私の肩にそっとオバちゃんが触れた。

「栗ちゃん、行きましょ」

私は頷いた。立ち上がって歩き出したが、もう一度だけ父さんを見た。その後ろにはまるで血が垂れたような真っ赤に色づいた彼岸花^{リス}が咲いていた。

…また、会いに来るね。

私は踵を返して、オバちゃんに歩調を合わせて歩き出した。

14・また会う日まで（後書き）

今回のサブタイトルはその名の通り、「また会う日まで」。リコリスの花言葉編はこれで最後です。

何とも言い難い何か胸に蟠る赤いものがぐつと残る感じでした。これが彼岸花リコリスのイメージかな、なんて思いつつとっても久々な投稿なものでした。

15・カトレア

変わらない日常。

色褪せたセカイ。

荒んだココロ・・・

そのときふいに、俺の前を蒼い蝶が横切った。

俺は蝶を追いかけた。その蝶が放つ蒼い光と深い闇の哀しみに魅せられた。

その蝶が放つ魔力に吸い寄せられたんだ。

俺はにカトレアに垂れている小さな雫を眺めていた。キラキラと水晶玉のように輝いて、健気に咲く花をよりいっそう輝かせる雫。

空のナミダ。

これは一体、空の上にいるダレが流した涙なんだろうか。俺はその雫に無性にキスしたくなった。

しかし、口づけると雫は、ポチャンツと音を立て、床で弾けた。

「健気に花にしがみついて、強がっている。でも、本当は脆くて壊れやすい・・・聞いている？」

万華鏡のようにいろんな表情を見せる君を俺はいつのまにか目で追っていた。

キミを初めて見たのは、俺の心が酷く澱んだ色をしていたあの夏だった。

嫌な知らせを聞いて、何もかも投げやりにしくなって・・・俺はただ呆然として海沿いを歩いていた。

そう、その刻だ。少女がオレの前を横切った。日本人にあるまじき栗色のふわふわした髪に、薄いグレーの大きな瞳。そして、オレを見てふわりと笑った。

「お客さんですか？あつ、海の家いま、オバちゃんの作ったたこ焼きがおいしんですよ！よかったらきてくださいね」

大きな甘い瞳に俺が映る。

「あつ、あの？」

少女は少し困った顔をして俺を見ていた。その時まで固まっていた俺は、ふと我に変えると、口元を上げて笑った。

「はい、是非…」

俺は少女について行き、古びた海の家に入った。少女が注文してきたので、「たこ焼きを…」と答えた。

「飲み物はいかがですか？」

少女は顔を綻ばせて笑った。心臓がうるさいくらいにドクドクいつて、その少女を今すぐ抱き締めたくなった。何考えてるんだ。

そんなことをしたら、公然猥褻罪で捕まってしまうだろうが。

チリチリと肌を灼く熱が、俺の頭をも混乱させていた。

「じゃあ、コーラを…」

少女は頷いた。店の奥から、おばさんが出てきて、少女を呼んだ。

「栗ちゃん、こっち、こっち！」

「あつ、オバちゃん待って！」

栗と呼ばれた少女は俺に会釈して、店の奥へと入って行った。

「栗…、というのか。涙みたいな名前だな…」

俺は顎の前で手を組んで、クスリと笑った。

ちょうど、退屈してたところだし、あいつをからかってやるか…。

俺は、東を誘って、その海の家でアルバイトすることにした。

しかし、少女は、初めて会ったときとは違い、恨めしそうな目で俺を見ていた。

俺は何故だか、腹が立って、雫にわざと突っかった。雫はいつも、頬を膨らませて、ぷりぷり怒っていた。

時々、アツカンバーして、唇から僅かに覗く赤い舌を無性に絡めとりたくなった。

雫はいつもバイトが終わってから、海に潜った。俺が雫の顔を見たとき、今にも泣きそうで、壊れてしまいそうで…。俺が守ってあげなくちゃって思った。

いつもはぷりぷり怒ったり、笑ったりしてるくせに、その顔は初めてだったから、何故か胸の奥が疼いた。

イヤな予感がして、俺は雫を遠ざけたかった。だけど、気づいたら雫を目で追っていて、目ん玉をほじくり出そうかと躍起になった。

恋なんかじゃない。ただ、アイツは俺と同じ匂いがするんだ。だから、だから…。何も考えたくない。この先、何も知りたくない。愛も恋も信じない。

雫は誰とも付き合わないって言った。なのに、アニキと気づけば付き合っていて、「なんで？」それだけが頭に浮かんだ。

なんで、何で？ナンデ？

雫は、愛を信じないんじゃないのか？

「なあ、尾行とか止めようぜ、東、山辺…」

二人は口元に手を当てて俺を睨んだ。

「しーっ！一ノ瀬君も気になるでしょっ！」

「そうだよ。雫ちゃんが楓先輩とくっついてもいいんだね？」

二人はギロリと俺を睨んだ。何故、俺が…。雫と楓の初デートの日、朝からやって来た二人は、無理矢理俺を此处まで引っ張って来た。

別に、いいじゃん。俺はただ、仲間が欲しかっただけで…。チラリと横目で雫を見ると、横の楓を見てふわっと笑った。

それがなんだか、無性にイラついた。

室内プールに入った二人は仲良く弁当を食っていた。

あの弁当は…雫が作ったんだろうか。雫はすぐに食べ終わって、プールに入ると、ただ浮き輪に座って天井を眺めていた。

たぶん、海とは違うなあ、とか考えているんだろう。

雫は楓に何か言って、洞窟の方に入って行った。雫の顔色が悪い気がして、俺は雫を追いかけた。

「あつ！何処行くのっ、一ノ瀬君！見つかっちゃうよ！」

「一ノ瀬君っ！」

二人の声があったが、俺は夢中で雫を追いかけていた。

洞窟に入ると、中は真っ暗で、何も見えなかった。

しかし、目が慣れて来ると、一点から波紋が出ていた。

雫だ。

肩をガタガタ震わせて、今にも崩れてしまいそうな雫がいた。

俺はその怯えた小動物のような小さな背を包み込んだ。

「もう大丈夫だから…大丈夫だから…」

俺が守ってあげるから、その言葉は彼女には聞こえなかったらしい。カクンツと膝が折れて、俺にのし掛かって来た。

「雫!？」

ガクガク揺らしても起きない。その内、入口の方から楓の声がした。

「雫ちゃんー！何処にいるのーっ！」

俺は雫を床に寝かすと、物陰に身を潜めた。暫くして、雫が起きて、楓が雫を抱き締めた。それから、アニキが拗ねたらしく、その背に雫が声をかけた。

「大丈夫だから…」

『もう大丈夫だから…大丈夫だから…』

なんで、それを雫が楓に言うんだ。

俺が啞然としたまま、東と山辺の元に帰ると、二人は口をあんぐり開けて俺を見た。

「どうしたの、その格好…！」

東が言って、自分の身体を見渡すと、濡れた服が、びっしょりとして肌に貼り付いていた。俺は頬を掻いた。

「えっと…、プールに落ちちゃって…」

「え！？大丈夫っ！？着替えあるの？」

山辺がギョツとして俺を見た。そういや、Ｔシャツは持ってるけど、ズボンはないな…。

「俺、売店見てくるわ。Ｔシャツ持ってないし…」

二人はこうなることを考えていたのか、スクール水着でプールに浮いたまま頷いた。

「ていうか、お前ら、準備良すぎ…」

俺が笑うと、二人は顔を見合わせた。

「一ノ瀬君って、そんな風に笑うんだね」

え？

「…別に、どうでもいいだろっ」

俺はほんのり赤くなった顔を逸らして、売店に行った。適当にＴシャツを買って、更衣室で着替えていると、外から東の声がした。

「一ノ瀬君っ！早く、早くっ！もう、二人とも出ちゃったよっ！」

だから、何で俺が…。カーテンから顔を出すと、あたふたした顔で東が立っていた。

「…山辺さんは？」

俺が睨むと、東はうん、うんと頷いた。

「雫ちゃんと、楓先輩を追いかけてるよっ。僕らも早く行こっよ」

俺は、呆れて溜め息をついた。

「そんなに気になるんなら、二人で追いかければいいだろ。俺は、もう帰るよ」

東は俯いて口をモゴモゴさせた。

「…だって、二人ともすごく良い雰囲気で、丘の方へ行っちゃって…。このままだと…僕…」

肩眉を上げて、言い淀んでいる東を睨んだ。

「僕…何？」

東はキツと俺を睨んだ。へえ、反抗的な目も出来るんじゃない。俺は余裕で鼻を鳴らして東を上から見下ろすと、東は俺に向かって怒鳴りつけた。

「僕は、雫ちゃんが好きなんだ！誰にも渡したくないんだっ！だから、君が行かなくても、僕は雫ちゃんを追いかけるっ！」

それだけ、言うところ「はぁ…はぁ…」と荒い息を上げて、俺を睨むと、踵を返して駆け出した。

俺はそれを啞然として見ていた。

好き？スキ？

「好きって…なんだよ」

俺は髪を掻き上げて、地面を睨んだ。もちろん、答えは何処にも書いてなどいない。

俺は鞆を引っ付かむと駆け出した。何故か分からない。たぶん、東の言った「好き」の意味を知りたかったからだ。

しかし、丘の上に着いたとき、俺は目を見開いた。

目の前には、コスモスの花畑にしゃがみ込んで、顔を寄せ合う二人が居たから。

楓の顔が近づくと、雫は目を瞑った。そして、穏やかな顔で楓を受け入れた。

雫と楓が触れ合う唇を凝視していた。

なんで…、心が…頭が割れるように痛い。身体中が火のように熱い。

俺はおかしくなってしまうたんだろうか。

その原因は、恐らく雫だ。

雫がこの目に止まってから、俺はなんだかオカシイ。

昼も夜も雫のことばかり考えて、眠れない日まであって…。特にアニキと付き合い初めてから、眠れない日が続いている。

そうか、疲れてるんだ。そうなんだ。

それからどうやって家に着いたのか、分からないが、気がついたら俺はベッドに横たわって、ただ呆然として天井を見ていた。寝返りを打つと、俺は蹲った。

なんか…どうでもいい。

その時、部屋のドアがコンコンッと鳴ってアニキが入ってきた。俺は楓を睨んだ。

「透、今日は一日中何してたの？」

そんな俺の内心なんて露知らず、満面の笑みで話す兄貴。

「家にいた」

そのままそっぽを向くと、楓が俺の腰を揺すった。

「何？」

「栗ちゃんがね…」

「そんなの、俺は聞きたくないっ！」

俺が怒鳴ると、楓はギョツとした顔で俺を見た。

「…透？」

「ごめん、もう寝るから、出てって」

「分かった…。夕飯は？」

「いない」

「そう…」

兄貴の背中少し寂しげで、俺は自己嫌悪した。

「何やってんだよ…自分」

15・カトレア（後書き）

カトレアの花言葉は（魔力・あなたは美しい・優美な女性・純粋な愛・成熟した魅力）。夏に舞う揚羽蝶は美しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5114n/>

クンツァイト

2011年6月4日06時10分発行